力であります。

九　二種の忍耐

今暫く旅行に就いて、一例を示しませうか。若し此に人があつて、萬里の遠方に行くに方り、初め彼れが其の地に行からと決心したのが、即ち旅行に就ての立志であります。然し其の目的地に到達せんとするには、風雨の難もあれば寒暑の難もあります、嶮山石路の難もあれば兇賊惡獸の難もあります。而も其の千萬里の長途を、一日や二日の歩行にては決して到達することは出來ませぬ。實に其の地に到達するまでには、數百日の時間を經るにあらざれば、如何

九、二種の忍耐

に健脚の者であつても其の目的地に到達することの能ないのは、言ふまでもなく明白なことであります。之れを要するに、私共は一時の旅行に就て之れを考ふるに、初め立志の必要あると共に、また其の志をして空しからしめざるは、全く

艱難に堪へる所の忍耐と
永久撓まざる所の忍耐と

の二種の忍耐が必要であります。獨り旅行のみでなく、人事萬般に就いて之れを考ふるに、如何なる艱難辛苦と雖も敢て之れを恐るゝことなく、益其の艱難辛苦に堪へる所の忍耐と、而も一時の艱難辛苦でなく、永久の艱難辛苦であつても、少しも撓まず能く辛抱して、忍び通す所の忍耐との、二種の忍耐が必要であります。此の二種の忍耐があつて、初めて私共の事業は成就するのであると謂つて宜いのであります。依つて私は、人生事業の成否は、立志の如何に依ると共に、又忍耐の強弱に依るものであると思ふのであります。

一〇　家康公の教訓

此の人生事業の成功に就きまして、彼の德川家康公が、三代將軍家光公に授けられたるものとして傳はつて居る所の教訓こそ、眞に善き坐右の銘であると、私は信じて疑は

一〇、家康公の教訓

ぬのであります。依つてこゝに其の教訓を擧げて置きませう。

人の一生は、重荷を負ふて、遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なく、心に望發らば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ、勝つことばかり知りて負けることを知らざれば、害其の身に至るべし。己を責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるに勝れり。

急らず行かば千里の外も見ん
うしの歩のよしおそくとも

先に擧げし光圀卿の訓誡も、俗談平易の中に、掬すべき

眞理の存在して居つたことは、諸君も既に知られたことでありませうが、今この家康公の垂訓も、亦同じく教訓的俗談の中に、いと高尚なる眞理が含蓄してあると信ずるのであります。

一一　道德と瞋恚

〔三〕道德と忍耐。次に私共の道德に就いて、忍耐の必要なる所以を陳べませう。先づ私共の道德に就いて、忍耐の必要なる所以を知らうと思はゞ、其の私共の道德を破壞するものは、果して何者であるかを考へて見ねばならぬ。而して私共の道德を破壞するものは、種々樣々あつて、決し

て一種でないことは勿論でありますけれども、釋迦牟尼如來の教訓に據つて見ますと、私共の道德を破壞する彈藥は、瞋恚であると說いてあります。私は前章に於て、瞋恚は人生を毒する惡魔の一であると言ひましたが、實に此れは畏るべき惡魔でありまして、此の惡魔の爲めに、私共は其の道德を破壞されて仕舞ふのであります。即ちこの惡魔たる瞋恚を以て火に喩ふれば、道德は恰も薪に似たるものと見てよいのであります。如何に多年間を要し、道德を修養し善事を積み累ねて置いても、若し一度び瞋恚の炎の燃え上ることがあれば、忽にしてあらゆる道德を燒き盡して、餘殘なからしむるといふ意味は、到る處の經文に見へて居るのであります。

成る程よく之れを考へて見るに、瞋恚と云ふこと、即ち「腹を立てる」と云ふことは、道德上の善心と相反するものに相違ありませぬ。それ故何んでも道德を重んずるものは、腹を立てぬやう、瞋恚を起さぬやうに注意せねばなりませぬ。然らば何うすれば腹が立たぬやうになるのでありませうか、果して何うすれば瞋恚若しくは忿怒と云ふやうな心が、起らぬやうになるのでありませうか。此の心の起らぬやうにするに就いて、最も必要なものが此の忍耐であります。故に若し瞋恚を以て火に喩ふるならば、忍耐は即ち水のやうなものであると謂つても宜しいと思ふのであります。

一二　瞋恚と忍耐

然して瞋恚即ち「いかり」と云ふものは、畢竟我儘心の増長した結果でありまして、忍耐即ち「こらへる」と云ふことは少しも我儘心の無い所でありますから、瞋恚と忍耐とは全く正反對の位置に在るのであります。故に瞋恚の炎の燃え上る所には、忍耐の水は決して流れて居りませぬ。又忍耐の水の少しでも涌き出づる所には、決して瞋恚の炎の燃え上ると云ふことはありませぬ。此に於てか忍耐と云ふことが私共の道徳上に於て、如何に必要であるかを、篤と考へて見ねばなりませぬ。前に申しました通り、私共が其の境遇

に安んずるに就いても、忍耐が必要でありました。又私共が事業を成就するに就いても、忍耐が最も必要でありました。然し夫れよりも私共の道徳の實行に就いて、更に一層必要とするものは、此の忍耐でありますから、私共が道徳の實行に就いて、實際に忍耐するやうに致したいものであります。

一三　釋迦如來の教誡

此の道徳の實行に忍耐の必要なることに就いて、釋迦牟尼如來が、懇なる教誡を垂られて居ります。而もその教誡は寔に一々適切なるものでありますから、今諸經の中より

一三、釋迦如來の教誡

二三の文を和譯して、讀者諸君の修養上の參考に供へ度いと思ふのであります。

忍は是れ安樂の道なり、忍は能く孤獨の身を護る、忍は能く親友を作る、忍は美しき名譽を增す、忍は能く富貴を得る、忍は能く威力を得る、忍は能く工巧を成す、忍は能く怨敵と憂惱とを伏し、(中略)忍は偸盜、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚等を離る、忍は能く布施、持戒、精進、禪定、智慧等を成す、是れ即ち佛法なり(大集經)

菩薩は常に能く忍耐の法を修め、自ら謙りて他を恭敬ひ、顏を和げて自を害せず他を害せず。自を擧げず他を

擧げず、自を讚歎せず他を讚歎せず、唯此の念を爲すべし。我當に法を說いて、一切の惡を離れしめん、即ち貪欲、瞋恚及び慳嫉、諂曲等を斷たしめ、大忍の法を以て安立せしめんと思ふべし。菩薩は自ら淨淸なる忍法を成就せるを以て、假令衆生ありて惡聲を出し、罵詈し鄙しめ譏り穢さんとするも、又其の手に刀杖を執つて、槌擊毀害らんとするも、菩薩は常に此の念を爲して恚らず。我れ若し是れ等の事に因つて、恚の心を生しなば、未だ自を調伏せざるなり。何ぞ歡喜の心を以て、他を解脫せしむることを得んやと。此の如く觀するものを菩薩の行といふ。(華嚴經)

一三、釋迦如來の教誡

一三、釋迦如來の教誡

恐の明は日月の明に踰えたり。龍象の力は猛く盛なりと雖とも、之れを恐に比すれば、萬々にして一に如かず七寶の燈は凡俗の貴ぶ所なりと雖も、而も彼は時に愛を招き、災患を致すことなきにあらず、獨り恐の寶は始終安きことを得るのみ。十方に布施すれば大福ありと雖ども尚は恐に如かず。恐を懷き慈を行ぜは世々に怨なく、中心恬然として終に毒害あるをなし。世間恃むべきものなし、唯だ恐のみ恃むに堪へたり。恐は安宅なり、災怪生せず。恐は神鎧なり衆兵も之れに加ふることなし。恐は大船なり、以て能く難を渡るべし。恐は良藥なり、能く衆の命を救ふことあり、恐者の志す所、事として成就

せざらんや。（恐厚經）

一四　余の自白

如上人生にわつて、恐耐の最も必要なる所以を、三方面に分つて辯述したのでありますが、これは道理上より考へたことゝ、又實際に當つて考へて見たことゝであります。而して此の考と云ふは、實際私の良心が考へたのでありまして、私の良心は斯く信じて居り、而も私の良心は私に斯く命令して居るのであります。されど若し讀者諸君よりして、汝は眞に恐耐家であるか、諸事に亘つて堪恐强きものであるかと問はれますれば、私は之れに返す一言の辭をも

一四、余の自白

有つて居らぬ者であります。私は茲に慨悔します、私は實に忍耐力に乏しく、諸事に亘つて堪忍することの出來ない者であります。然し私は忍耐力の至つて乏しい者でありますけれども、此の忍耐の必要なることを、深く〳〵感じて居ることは、世の多くの人に讓らない積りであります。而して自ら其の必要なるを深く信じて居るの餘り、茲に老婆心が溢れて、此の一章を陳述した次第であります。

一五　忍耐の修養法

然し忍耐の必要である以上は、其の忍耐力を養成する方法を講ぜねばなりませぬが、如何にしたならば、此の忍耐

力を養成することが出來るでありませう。先づ私自身に就て申しますれば、前に擧げた三方面の中に於ては、第三の道德上に就ての忍耐力を、最も欠乏して居るのであります。即ち私は其の瞋恚に富んで居るのでありまして、至つて憤り易いと云ふことは、私の最も短處とする所であります。然るにまた自己の實驗上此の瞋恚の炎を消却する爲めに、最も力强きものは此の忍耐でありますから、忍耐の修養法としては、左の二種の修養法が最も善からうと思ふのであります。

(一)消極的修養法

(二)積極的修養法

消極的修養法と云ふは、禪宗に所謂本來無一物の觀念をするのであります。元來私共が怒り腹立つと云ふは、何を以て其の原因とするのでありませう。例へば彼の人が私を罵詈したと謂つて、非常に怒り腹立つと云ふものは、畢竟するに其の言葉を以て、最も確實なものとするからのをであります。然るに其の言葉と云ふものは、決してさう確實のものではなくて、言葉と云ふものは唯是れ音聲の上の屈曲的文に過ぎないのであつて、而も其の聲は發すると同時に消滅して、今や何等の跡形もない者であると云ふやうに考へ來れば、之を怒らんとしても、怒るべき事柄が無くなつて仕舞ふのであります。即ち怒るべき事柄が無くなつて

見れば、瞋恚は急に轉じて忍耐となるべきは、言ふ迄もないことであります。

次に積極的修養法と云ふは、彼の眞宗などに在つて謂ふ所の阿彌陀如來に對する信仰であります。即ち初の消極的修養法の方は、平凡の人に取つては少し困難であるから、此の積極的修養法を設けたのであります。而してこの積極的修養法と云ふものは、彼の佛陀を信ずるのであります。如來を信ずるのであります、我の心の中に於て、實在の佛を信仰するのであります。言ひ換へますと、天地間に充滿したまへると共に、又私共の體の中にも、心の中にも、常に恒に充ち滿ちたまへる無限の慈悲者を信じ、己も彼の慈

一五、忍耐の修養法

悲者に化せられんとするのは、即ち積極的宗教心と云ふものであります。此の積極的宗教心があれば、瞑悲も忽ち轉して忍耐となつて來るのであります。

然らば道德的忍耐力を養成する者は、全く宗教の手であると斷言してよいと思ふのであります。それ故に凡そ消極的宗教心であれ、又積極的宗教心であれ、忍耐力の强弱は、一に此の宗教心の厚薄に由るものであると、謂つてよいと思ふのであります。要するに私共が、忍耐心を養成するに就いては、是非共宗教の力を籍らねばならぬのであります から、此の宗教の力を籍り來つて、忍耐力を養成し、以て人生の本分を完うせねばならぬのであります。

第七　人生の三德

一　德とは何ぞや

德とは如何なるものかと問はれて見れば、何人も簡單に即答し難いものであります。元來德とは顯微鏡に照して見るとも出來ねば、亦望遠鏡に依つても見ることも出來ませぬから、無いものであるかと云へば、やはり有ることは事實であります。昔より「有德の君子」と云ふやうな語もありまして、昔から德と云ふものは存在して居つたのであります。今日でも彼の人は德者であるとか、或は彼の人は德望家であるとか、又はあれは彼の人の德であつて、他の人では迚

一、德とは何ぞや

も出來ぬことであると云ふやうなをよく申しますから、今日でも德と云ふものは無いとは申されぬので、屹度有るのに相違無いのであります。然らば德とは何んなものであるかと問はれて見ると、何分にも形の無いものであります から、一言の下に之れを分り易く答ふることは、至つて困難なのであります。然し之れ丈けの事は謂つてもよいと思ふのであります。即ち多くの人々が、眞實心の底より尊び敬ひ、且つ親しみ從ふて來る價値の出來た所が、德と謂はるべきものであります。更に之れを言ひ換へますと、多くの人々に信用せらるゝやうになつた所が、所謂德と云ふものであります。然しかく申したばかりでは、まだ德と云ふ

ものが、明になりますまいから、此に子思の三德と釋迦の三德と私の考へた三德とを擧げ、事實に依つて辯述して見やうと思ふのであります。

二　子思の三德

〔一〕子思の三德。支那の子思と云ふ人の著した、『中庸』と云ふ書物の中に、『智仁勇の三は天下の達德なり』と說てありまして、智と仁と勇との三を以て、人生の三德としたのであります。若しこの三つのものが、全く缺乏しましたならば、殆んど人たるの價値はないといふて宜しい、全く動物と同樣であつて、此の智仁勇の三つは、眞に人の人たる特

徵となるのであります。然し同じく此の三つのものを有して居りましても、五人の智仁勇を比較すれば必ず五段に分れ、十人の智仁勇を比較すれば必ず十段に分るといふやうに、限りなく其の等級が分るゝのであります。それゆゑに一段でも、此の智仁勇の三つのものが發達進歩して、少しでも勝れた智仁勇を備へて居る者が、所謂德者と言はれるのであります。語を換へて之れを申しますれば、此の智と仁と勇との三つのものを、少しでも多く持つて居るものは其れ丈け多くの人に尊まれ、敬はれ、親まれ、近づかれ、又信服せらるゝやうになつて參るのでありますから、此の智と仁と勇との三を以て、人生の三德としたのであります。

三　智仁勇と智情意

今日の心理學に於ては、私共の心を智情意の三部に分つて居りますから、若し此れを心理學に問ふたなら、智仁勇は即ち智情意の三部であつて、智は智力である、仁は感情である、勇は意志であると答ふるでありませう。成る程人の人たる所以のものは、其の本を尋ねて見るに、心の中に於て、智情意の三つのもの丶外ではないとして見ますれば智仁勇は愈以て、人の人たる所以を完からしむるに就て、頗る必要のものであります。然のみならず、又其の人格をして益高からしむるものは、亦此の智仁勇でありますから

之れを以て人生の三德としたのであります。

四　智德

先づ最初に智に就て考へて見るに。全く一丁字も讀めぬと云ふやうな人、即ち一二三の數字も書くことが出來ねば又二二が四といふ計算も出來ぬと云ふやうなものは、如何に完全な身體を有して居りましても、決して人の上に立つことは出來ませぬ。人の最下層に在つて、殆んど動物に似たる生活を爲さゞるを得ぬのであります。之れに反し、管に文字が讀めるばかりでなく、地理、歷史とか數學理科とか、其他女子であれば裁縫音樂とか、或は其の他百般の藝

能に達して居る者は、自ら求めなくとも多くの人々より尊敬せらるゝことは、洵に疑はれぬ眞の事實であります。斯くて智は人格を高からしむるに就て、最も必要のものでありますから、之れを三德の一に數へたのであります。

五　仁德

次に仁に就て考へますると、此の仁と云ふ言葉には、頗る寬き意味を含んで居ります。しかしどんな人にでも極く分り易く申しますと、「おはれみ」「なさけ」「いたはり」「思ひやり」などゝ言はれる心であります。或は博愛と云ひ、慈悲と云ひ、或は又同情と云ふ言葉は、皆此の仁の一端を說いたも

のであります。古來『人は仁なり』と云ひ、或は『人仁を得れば則ち尊し』と敎へ、或は又『人の萬物に靈たるを得る所以は仁にあり』と釋したものがありますが、凡そ人の人たる資格を得て尊き所以のものは、一に此の仁德があるからであります。人にして若し此の仁の心を全く缺乏し、他人を憐み情をかける心がなく、却つて己の爲めに他人を害い、苦しめるやうな者がありましたならば、幾は全く人としての德を缺いて居る、人面獸心と言はねばならぬのであります。之に反して、仁慈の心の少しでも多く有つて居る者、即ち「あはれみ」「なさけ」「いたはり」「思ひやり」の心の多い者は、それ丈け人としての德を備へて居る者と謂はねばなりませぬ。

此の如き人は必ず多くの人々に尊敬せられ、且つ又親近せられ信服せらるゝのでありますから、此の仁を以て三德の一に數へたのであります。

六　勇德

次は勇でありますが、此の勇に就て匹夫の勇といふものと君子の勇と云ふ者とがあります。彼の土方などが、少しばかりの行き違よりして無益の口論を初め、それが本となつて腕力を用ひ、終に兇器に訴へて、斬るの殺すのと云ふやうな騒を起し、血を見ても尙ほ止まぬと云ふやうなことは、所謂匹夫の勇と云ふものであります。是れ等は全く犬

の咬み合をするのと選ぶ所なく、決して人の德として數ふべき所のものではなくて、却つて人の德を傷ける所のものであります。之れに反して、人の德として數ふべきものは所謂君子の勇と云ふ方であります。君子の勇と云ふは、何事に依らず、人の爲めにすべき正義公道に向つて、自ら進んで之れを爲さんとする志の溢れた所を云ふのであります。言ひ換へて見ると、凡べて善に向つて勇ある意志は、君子の勇であると謂ひ得るのであります。世には善いことゝ承知しながら、而も自ら進んで之れを爲す意志の發り兼ぬる人がありますが、此の如き人は勇氣の無い人と謂ふべきであります。又何事に依らず善事と聞けば、自ら進んで之れを爲さんとする意志の强い人も、稀には有るものでありますが、此の如き人は眞に勇氣ある人と謂はざるを得ぬので、斯る人の勇氣を稱して君子の勇と云ふのであります。此の君子の勇は決して男子に限られたものではなく、女子にも通じて居るので、此の勇氣あつて初めて、多くの人々より尊敬せらるゝのでありますから、之れを三德の一に數へ擧げたのであります。

七　三德の相關

之れを要するに、人は必ず此の勇氣あつて、初めて智を進ましむることを得、以て自ら智の德を得るのであります。

七、三德の相關

又人は必ずこの勇氣あつて、初めて仁を行ふことを得、以て自ら仁の德を得るのであります。若しこの勇氣なければ自ら智の德を得ることが出來ぬのみならず、又仁の德をも得ることが出來ぬのであります。更に飜つて之れを考ふるに、此の勇氣は前の智に依りて、君子の勇たることを得るのみならず、又前の仁に依つても、君子の勇たることを得るのであります。彼の所謂匹夫の勇なるものは、智もなく亦仁もなき蠻勇でありません。故に智仁勇の三德は、恰も鼎の三足の如く、互に相待つて人生の德たることを得るのであります。此れに依つて之れを觀るに、人は徒らに功名富貴を求めんとするよりも、寧ろ此の智仁勇の三德を求むることに注意せねばなりませぬ。功名富貴の如きは、抑も末でありまして、三德は凡べての本であります。

八　釋迦の三德

〔一〕釋迦の三德。佛敎の中には、法身と般若と解脫とを以て、涅槃の三德として說いてありますが、又智と斷と恩とを以て、之れを佛陀の三德として說いて有るのであります。法身、般若、解脫の三德は頗る深遠の者でありまして、通俗的に之れを說くことは、餘程困難なことであります。而して前に陳べました子思の三德と、其の意味の上に於て稍相合する邊のあるは、智斷恩の三德でありますから、茲

八、釋迦の三德

に少しく智斷恩の三德に就て、述べて見たいと思ふのであります。

九　子思の説と釋迦の説

前に擧げた所の子思の三德は、即ち孔子の敎より來つて居るのでありまして、佛敎に所謂三德は、釋迦の人格を讃めたものでありますけれど、釋迦敎より出たのでありますから、爰に釋迦の三德としたのであります。然らば一は儒敎の精神より出で、一は佛敎の精神より出でたので、其の兩者の全く同じくないと云ふことは、固より當然のことでありますけれども、又其の間に一致する所が無いことは無

いのであります。即ち彼れが所謂智と此れが所謂智とは其の名を同じくすると共に、また其の意味の同じきものあるは、言ふまでも無いことであります。又彼れが所謂仁と此れが所謂恩とは、其の名を異にして居りますけれども、其の意味に於ては大なる相違なしと言ふよりも、寧ろ同じ意味のものであると謂つて宜いのであります。又彼れが所謂勇と此れが所謂斷とは、其の名を異にして居るのみならず其の意味も相違して居るやうに見へますけれども、これとても敢て氷炭相容れぬと云ふ程のものでも無いのであります。

一〇　世界第一の德者

釋迦の三德を陳ぶるに先きだつて、少しく釋迦の德を讃嘆したいのであります。抑も此の世界の歷史あつて以來、西洋と東洋とを問はず、德の一番勝れて居つた人は誰れでありませうか、私は釋迦如來であると答ふるのであります。

凡そ全世界中、釋迦如來に勝れたる德者は、未だ聞かざるのみならず、釋迦如來を第一として、第二第三の地位を占むべき德者すら、未だ有りはしなかつたと、謂つて宜しからうと信ずるのであります。彼の基督の如きも德者でありました、又彼の孔子の如きも德者でありました。然し彼

の基督の如きに至つては、殊に反抗者があつて、其の徒のために、十字架の刑に處せられざるを得ぬことになつて、終に非命に斃れた人であります。

然るに釋迦如來に至つては、當時の印度が國家の分裂に又宗教の分裂を重ね、而も又社會的人種の分裂を來たし、實に種々の方面に於て、異主義の者の集合となつて居つた印度に生れながら、何れの國王も何れの宗教徒も、亦何れの人種も、皆な嬰兒が慈母の下に慕へ來るが如く、釋迦如來の前に信服し來つたのであります。然のみならず、其の餘德は延いて、幾千年の後に及び、而も歲月を經過するに隨つて、其の德光の四邊に耀き渡れるものあつて、今尙は

世界に十五億の人ある中、五億の人が尊敬して止まぬと云ふ有樣であります。

然れば此の如き德者は、實に釋迦如來唯一人でありまして、其の外には一人も無いのであります。依つて私は、釋迦如來を推して、世界第一の德者であると、讃嘆し奉るのであります。

一一　釋迦の智德

偖て釋迦如來が、此の如き德を得られました、其の源を尋ねて見まするに、全く智と斷と恩との三つであります。先づ第一に智德に就て申しますれば、彼の釋迦如來は科學

者でもなく、哲學者でもなく、又法律學者でも無かつたのであります。然し彼れ釋迦如來は、眞理の又眞理を極めた所の人でありました。人生の秘奥を探り得た所の人でありました。何人も未だ覺らざる、究竟の眞理を大覺した所の人でありました。大覺すると共に又大安心を得た人でありました。而して釋迦如來の此の大覺は實に多くの人をして信服せしむる所の本となつたのであります。又其の大覺は、全く大智に依つて得たのでありますから、釋迦如來をして此の如き德者とならしめたものの一は、確に智にありと謂はざるを得ぬのであります。

一二　釋迦の斷德

次に斷德と申しまするのは、凡べての煩惱を斷盡して、一つの煩惱もあることなき身となられた所を謂つたものであります。普通には之れを煩惱と云ふよりも、寧ろ罪惡と言つた方が分り易かろうと思ひます。扨て私共の道德とは若し消極的に言ふならば、罪惡を斷ち切つた所にありと謂つて宜しからうと思ひます。而して釋迦如來の道德を、消極的方面より說いて、彼れが一切の罪惡を斷じ、あらゆる罪惡と全く絕緣するに至つた所を、斷德と謂つたのであります。此の如く彼れが一切の罪惡と絕緣するに至つた所は

彼れが世界第一の德者となつて、多く人々より仰望尊敬せらるゝ身となつた根本であります。此に於て『中庸』に所謂勇とは別のものであつて、而も其の間に意味の通ずる所あることを、一考すべきであります。先づ私共が一切の罪惡を斷つて、此れと絕緣せんとするには、最も勇猛なる意志力、即ち勇氣が無くてはならぬのであります。然らば彼れが所謂勇と此れが所謂斷とは、別のものであつて、而も其の間に意味の相通するものあることを、容易に認むることを得るのであります。

一三　釋迦の恩德

第三に恩德と申しますのは、此れは釋迦如來の道德を、消極的方面より說いたものと謂ひ得るのであります。扨て儒教の道德は、根本的に其の要領を提ぐれば、一に仁にあるが如く、釋迦如來の道德も要を取つて之れを攝し來れば、一に恩にありと謂つて宜いのであります。而して此の恩と仁とは、其の名を異にして居りますけれども、其の意味より見れば、全く一致して居るのであります。即ち釋迦如來は慈母の一子を視るが如く、眞に世界の活ける燈明臺となつて、私共を惡しき道より善き道に導き給へる、大救世主

であります、大恩師であります。此の如く釋迦如來が、自ら進んで大救世主となり、大恩師となられたことは、亦以て世界第一の德者として、仰信せらるゝ身となられました所以であります。

一四　智斷恩三德の修養

然しながらこの智斷恩の三德は、唯だ釋迦如來御一人に讓つて置く譯には行きませぬ、今日現在の私共と雖も、其の分限に應じて、出來得る限りの智力を研き(智德)、又成るべく罪惡と絕緣し(斷德)、更に及ぶ限り他人に對して恩惠を施すやうに致さねばなりませぬ(仁德)。釋迦如來は此の三德

一四、智慧恩三德の修養

に依つて、多くの人に仰ぎ拜まれる身となられたのであり
まして、若しこの三德が無かつたならば、又私共に至るま
で、彼れを尊び彼れを敬ひ、彼れを祭り彼れを拜むやうな
ども、無かつたであらうと思ふのであります。又今日現在
の私共と雖も、若し釋迦如來に等しき三德を圓滿具足して
居つたならば、釋迦如來が多くの人々より尊敬せらるゝ如
く、私共も多くの人々より尊敬せらるゝであらうと、深く
信じて居るのであります。然し私共が釋迦如來に等しき三
德を圓滿具足するとは到底不可能事であると云ふとも、亦
明白なることであります。けれども、私共が釋迦如來に等
しき三德を圓滿具足することは出來ぬと云ふても、進んで

釋迦を敬ふと云ふ心までを棄てゝはならぬのであります。
事は何事に依らず、身分相應と云ふことがありますから、
私共も亦身分相應に、此の三德を修養せねばなりませぬ。
而して其の身分に應じ、智と斷と恩との三德を養成すること
とは、人生に取つて最も必要のことでありますから、今此
の釋迦の三德を以て、人生の三德としたのであります。

一五　余の所謂三德

(三)　愚案の三德。如上陳べました子思の三德と釋迦の三
德の外に、更に私の考へました三德がありまして、私共の
人生上に於て、是非修養して置かねばならぬものと信じま

一五、余の所謂三德

す。而して其の三德とは、正直と勤勉と謙讓との三つであります。この三德に就ては詳に辯明するまでもなく、諸君は皆な共許の事であらうと思ひますけれども、少しく愚心を以て辯述を試みやうと思ふのであります。

一六　正直の德

人として正直ほど善いことはありませぬ。正直な人は親に好かれます、子に好かれます、夫に好かれます、妻に好かれます、兄にすかれます、弟に好かれます、姉にすかれます、妹に好かれます、友に好かれます、又社會全体の人に好かれます、又神にすかれます、又佛にも好かれるのであります。世界に正直の者を嫌ふ者は、唯の一人も無いのであります。之に反して邪曲心の者は、親に嫌はれます、子に嫌はれます、夫に嫌はれます、妻に嫌はれます、兄に嫌はれます、弟に嫌はれます、姉に嫌はれます、妹に嫌はれます、友に嫌はれます、又社會全体の人に嫌はれます、又神に嫌はれます、又佛にも嫌はれるのであります。此れに依つて、人の德として第一に敬ふべきものは、正直であると思ふのであります。

一七　勤勉の德

然し正直と云ふ中にも、馬鹿正直と云ふ者があります、

一七、勤勉の德

即ち忠直と云ふ者がありますから、此の正直に伴ふて必要なものは、勤勉と云ふことであります。如何に正直であつても、勤勉と云ふことが缺けて居る者は、未だ德として數ふべきほどの價値ありとは申されませぬ。それ故に人は正直と共に勤勉が必要でありまして、正直に勉強するといふことほど、尊いことは無いのであります。正直に勉強する者は、必ず神の護を受け、又佛の救にあづかる、如何なる惡魔も、正直に勉強する者には勝つことは出來ぬのであります。故に私は正直に次で、人の德として數ふべきものは勤勉であると思ふのであります。

一八　謙讓の德

然し人は、如何に正直に勉強しましても、傲慢があつたならば、其の傲慢の爲めに人德を傷ることが、最も甚しいのでありまして、折角の正直も勉強も、殆んど水泡に屬することになるのであります。それ故に人の德として數ふべきものは、第一に正直、第二に勤勉、第三に謙讓であると思ふのであります。而して謙讓は實に人の美德でありまして、謙讓の人に於けるや、恰も草木に於ける花のやうなものであります。梅であれ櫻であれ又菊であれ、多くの人々に愛玩せらるゝのは、一に花あるが爲めであります。人も

一八、謙讓の德

亦其の通りで、謙讓の美德があればこそ、如何なる人にも必ず愛せられ又敬せられるのでありますから、私は此の正直と勤勉と謙讓との三德を以て、人生の三德としたのであります。

第八　人生の三恩

一　人類と動物との異點

釋迦牟尼如來の滅後、凡そ七百年の後に出世し、而も後世より八宗の祖師と仰がれて居る龍樹菩薩は、其の著『智度論』の中に、『恩を知る者を名づけて人と爲す、恩を知らざる者を名づけて畜生と爲す』と敎訓を垂れ、恩を知つて其の恩に報ひよと示されてあります。今此の敎訓に依つて觀るに、人類と動物との異點は、恩を知ると知らざるとにあると謂つて宜いのであります。即ち己れが已に被つて居る恩惠を知つて、其の恩惠に報ひんとする意志のある者が人類

一、人類と動物との異點

であつて、已に恩惠を被つて居りながら、其の恩惠を被つて居ることを知らず、或は知つて居つても、之れを忘れたるが如く、之れに報ひんとする意志の欲けてないものは人でない、之れは畜生である、動物であるとの教訓であります。此の教訓に依つて調べて見れば、假令身は人類の仲間入をして居つても、其の心は畜生の仲間入をして居る者も或は有るであらうと、氣遣はれるのであります。

二　佛陀と凡夫との異點

又釋迦如來は、或る時斯う云ふことを申されました。私共の如き凡夫人と、彼の佛陀との間に於て、迷悟苦樂等種

種の差別ある理由、何れの點に有りやと云ふことに就いて一言を以て之れを言はゞ、恩を知ると知らざるとに由るのであると說かれたことがあります。即ち彼れ釋迦如來は、何に由つて佛陀たることを得たのであるかといふに、諸種の恩に能く報ひ給ひし結果であるのであります。又私共が何故迷の凡夫であつて、佛陀たることが出來ないかと云ふに、并は未だ諸種の恩に報ひざるが爲めであります。

今此の意を以て世間を觀まするに、凡そ世間の人々は、殆んど悉く恩を知らぬ者であります。假令其の中に恩を知つて居る者がありましても、恰も太陽を盆大の形として見るが如く、大恩を小恩にして見て居るのであります。而も

此の大恩を小恩として見るのみならず、其の恩を感知するも、曾に一時的のことであつて、忽ちに之れを忘れて仕舞ふのは、世間普通の人の做であると謂つて宜いのであります。既に恩を知らず、偶これを知るも、忽ちにして之れを忘却すると云ふ狀態でありますから、之れに報ひんとする者の稀れにして而も鮮きことは、固より言ふまでもないことであります。之れを言ひ換へれば、世間最大多數の人は、淺間しくも恩を盜んで暮す所の、盜賊であると謂つてよいのであります。凡そ道德上呼んで罪惡となすものは、皆この恩を忘るゝのが本となつて、終に恩に報ゆるに寃を以てするのであると謂つてよい道理があるのであります。

然るに彼の佛陀なる御方、或は世尊と稱し、如來と稱し或はまた菩薩と號する御方々は、全く私共と反對の御方でありまして、彼等は秋毫の恩と雖とも、決して盜む人ではありませぬ。己れが已に被つた所の恩は、皆能く之れを知つて之れを忘れず、隨つてまた能く之れを報ひることの、至れり盡せる御方が、取りも直さず佛陀であります、如來であります、菩薩であります。夫れは何故であるかと云ふに、凡べて佛陀とは善の現であつて、また一切道德の結果であります。而して其の善と云ひ道德と云ふものは、實に無量無邊ではありますけれども、何れも皆報恩的事業でないものはないのであります。

二、佛陀と凡夫との異點

之れに依つて佛陀なるものは、恩に報ゆることの至れり盡せる御方であると謂つてよいのであります。既に佛陀が然うであつて見れば、菩薩たる御方も亦同樣であります。菩薩とは己も亦佛陀たらんとして、種々雜多の道德的事業を勵み行ふて、息まぬ所の御方であります。而してその道德的事業なるものは皆悉く、報恩的事業の經營であります。而して『心地觀經』の中に「知恩報德是聖道」と說いてあるのが即ち如上の意味でありまして、恩を知つて其の恩に報ひんとする所の行爲は、皆悉く最高至聖の佛陀たることを得るの道であるとの敎訓であります。

三　知恩報德

此の如く動物と人類との區別は何れに在りやと云ふに、恩を知つて之れに報ひる意志の有ると無いとに依つて分ると說き、更に私共の如き凡夫と彼の尊き佛陀如來との區別は何れにありやと問ふに、之れも亦同じく恩を知つて、之れに報ひる心の有ると無いとに依つて、相分るゝものであると云ふ所より考ふれば、知恩報德と云ふことは、道德上最も樞要のことであります。之れに依つて私共は、如何なる方面より、如何なる恩を被つて、此に生存しつゝあるものであるかと云ふことを研究して、讀者諸君と共に、今後

成るべく恩を盗める盗賊の罪を免れ度いのであります。凡そ人として盗賊の名を以て呼ばれて、恥ぢざる者もなく、又自ら我は盗賊なりと云ふ者も、恐くは有りますまい。然しながら恥しいことには、今日の私共は、前の釋迦如來の教訓より推し來れば、全く盗賊の罪を犯さゝる者殆んど有ること無く、總べてが盗賊であると言はねばならぬのであります。

四　有形的盗賊と無形的盗賊

然らば今日の私共は、何故に盗賊であると言はれるのでありますか、之れを明瞭にせねばなりませぬ。先づ此の盗

賊と云ふに就て、凡そ二種類あるのであります。

(一)有形的盗賊。　(二)無形的盗賊。

其の有形的盗賊と云ふのは、形のある手を以て形のある物品を盗み取るので、普通に謂ふ所の盗賊のことであります。即ち政治法律の上にあつて、窃盗若しくは強盗の罪名を與へて處置するものは、唯だこの有形的盗賊に限るのであります。然るに宗教若しくは道德の上に在つては、此れ以上の所にあつて、而も此れよりも尙は恐るべき盗賊を認めて居るのであります。即ち形以上の處に於て、大なる盗賊を認めて居るのであります。而して先に申しました通り、恩を受けて之れに報ひんとする心なきものは、皆無形的盗

四、有形的盗賊と無形的盗賊

賊と云ふものであります。釋迦如來が或る時、

墻を鑿つて物を取るを、猶は盗賊と云はず、恩を受けて

恩に報ひざるものを名つけて大賊となす。

と誡められたことがあります『毘奈耶雜事』。此の如きは宗教若しくは道徳の方面にあつて謂ふ所の盗賊であつて、政治法律の上にあつて謂ふ所の盗賊ではありませぬ。

そこで若し此の有形的盗賊に就いて之れを言はゞ、世間に盗賊の罪を免るゝ者は、隨分多く有るでありませうけれども、若し無形的盗賊に就いて之れを言はゞ、世間に盗賊の罪を全く免れ得る者は、恐くは無いであらうと思ふのであります。倫理學若しくは他の宗教の上より考ふれば、何

うであらうか知りませぬけれども、私の信じて居る佛教の上から之れを觀れば、多少の恩を盗まぬ者は、眞に一人も無いと謂はねばならぬのであります。私はこのことを證明せんが爲めに、私共が諸方面から被つて居る所の、多數の恩の中から、暫く父母の恩と君主の恩と社會の恩との三種の恩を掲げて、辯明して見やうと思ふのであります。

五　父母の恩

〔一〕父母の恩。世の諺に『針小棒大』と云ふことがありまして、極めて些細なことを大袈裟に言ひ觸らすことがありますが、私共が父母の恩を見ることばかりは、針小棒大では

なくて、却つて『棒大針小』であります。乃で釋迦牟尼如來はいと懇に父母の恩の廣大なるを、説いて下されました。殊に父の方の恩よりも、母の方の恩を委しく十ヶ條にして『心地觀經』や『父母恩重經』の中に説き示し下されましたから今左に其の大意を述べやうと思ふのであります。

六　懷胎守護の恩

(1)　世界の人多しと雖も、我が未た此の世界に生れざる前に當つて、已に我が爲めに苦勞し、又我を思ふて呉れたものがありませうか、私は我が親を除いて外には、唯の一人も無いと信するのであります。獨り我が母のみ我の胎内に宿るや、十箇月の其の間は日一日よりも苦しく、自分の起居すらも意の如くならず、身體の動作すらも自由ならず食すれども甘からず、寢れども安からずと云ふ有樣でありましたにも拘はらず、我が母は自分の苦痛を歎かずして、却つて胎兒の我を念ひ、五體揃ふたる兒たれかし、強健の兒たれかし、美麗の兒たれかし、才智勝れた兒たれかし、産後には此の衣服を被せしめん、此の玩具を持たしめんと一に我を念ひ暮して呉れたのであります。斯くの如き人は、我が親を除いて外にあるで有りませうか、決して有らうとは思はれぬのであります。

七　臨産受苦の恩

(2)私は男子であつて見れは、懐姙の苦も知りませぬが、又産時の苦痛をも知りませぬ。然しながら眞宗の存覺上人が其の著『報恩記』の中に、左の如く説かれてあります。

産時の苦最も甚し、五臟も安からず、六腑も靜ならず腹に金鐵の山を呑むが如く、胸に劍林の刺を含むに似たり、人中の苦の中に第一の苦と見えたり、されば無爲に子を生じたる後と雖も、七ケ日の間は、尚ほ冥途に趣くべき人數に算へられ、冥官筆を執つて之を待つと云云全く然うでありませう。又昔二條院讃岐と申された宮人が

今の世の人は、生れし日を喜び、祝ひ祭るは、大なる僻事なり、吾れは此日に涙を流し、母の千苦萬苦を思ひて、食事をも忘れ、おもひくるしむに堪へたり。と申されたそうでありますが、心ある者ならば皆な斯うあるであらうと思ひます。眞に斯うなくてはなりませぬ。

八　生子忘憂の恩

(3)我が母は此くの如く、人生第一の苦痛の中に、我を産みながら、我が生れて呱々の初音を擧ぐるや、我が母は己れの苦痛を打ち忘れ、その呱々の聲を聞くや、恰も天樂を聞くが如く感じ、喜悅心を以て滿されたそうであります。

私は男子であつて見れば、此れを知ることは出來ませぬけれども、釋迦如來が御經の中に說き示されて居るのであります。

九　乳哺養育の恩

(4) 我が已に生れた後、別に死にもせず、生育し來つて、斯の如き身となることを得たかと云ふに、之れは全く母の力に依つて生育し來つたのであります。即ち母の懷を以て床となし、母の乳を以て食となし、母の皮膚を以て殆んど衣服となすが如き有樣で、育ち來つたのであります。實に我が母は炎熱燒くが如くにして、身に衣服を纏ふも尙ほ厭

ふべき極暑の時にも、常に恒に我れを懷に抱き育てゝ呉れたのであります。家事若くは職業の上に於て、寸暇を吝まねばならぬ繁忙を極めた時と雖も、我に乳を飲ませて呉れることに、油斷がなかつたのであります。寔に此の乳哺の養がなかつたならば、私共は假令此の世界に生れることが出來ても、現在今の身となることが、到底能なかつたのであります。

一〇　嚥苦吐甘の恩

(5) 生れてから最初の一二年は、全く母の乳に依つて育つたのでありますが、二三年を經過しますれば、漸く一般の

常食を喫するやうになつて參ります。其の時に至つて母は我に食を與ふるに、何等のものと雖も、總べて美味なるものは我に與へ、母は自ら麁惡なるものを味ひて、滿足して呉れたのであります。又時間も母は我に與ふることを先にし、己れの食することを必ず後にして呉れたのであります。此の如きことも唯だ聞いたのでは、何等の感じも起りませぬが、實際に當つて熟々考へて見るに、親でなければ、決して能ぬことであります。

一一　回乾就濕の恩

(6)又生れてより四五年の間は、母の懷を寢床として居つたのみならず、又母の懷を以て便所として居つたのであります。何ぜかならば、毎日幾度となく、大小の二便を以て母の懷を穢して居つたのであります。殊に夜間母と同衾すれば、又母の滯團を我の便を以て濕し穢したをは、殆んど毎夜のことでありました。けれども母は毎夜々々、兒の濕した不淨の方に自ら臥し、之れを穢した兒をば却つて乾いて居る滯團の方に寄せて、眠に就かしむるのであります。此の如きは中流以上の生活をなす人に取つては、有るべきことではありませぬけれど、下流社會の生活にあつては、決して珍いことではありませぬ。貧民社會の上に於ては、此の如き事實は常に認められて居ることであります。此れ

に依つて私共は、母の恩愛の眞に無限なることを、念はねばならぬのであります。

一二　洗濯不淨の恩

(7)凡そ人の最も不淨として居るものは、糞尿でありまして、而も人間の糞尿は、他の動物の糞尿よりも、尙ほ一層不淨なるものゝ如く感ずるは、人情の儆であります。然るに我が母は我の襁褓を初めとなし、或は母の膝及び其の他如何なる處をも擇ばず、大用小用の不淨を以て之れを穢した物を意りなく、洗濯して呉れたのであります。而も我が母は愛のために、之れを左程不淨と思はずに、洗ふて呉れたのであります。それ故に『父母恩重經』等の中には、『父母は恩愛の餘り、襁褓のけがれたる時などは、母自身の袖を以て兒の糞を洗ひ、或は母自身の手を以て、兒の尿などを洗ひなどして、十指の爪の中には、常に兒の不淨を挾む、從つて飲食するに當り、覺へず兒の不淨を嘗むるに至る』と說いてあります。此の如きことも上流社會の人にあつては知り得べからざることでありますが、下流社會に於ては珍しからぬことであります。

一三　爲造惡業の恩

(8)富貴の者にあつては、然う云ふこともありますまいが

一三、爲遺惡業の恩

貧賤の者にあつては、其の兒を養育せんが爲めに、父母は心ならずも、惡業を造ることの頗る多きは、亦以て疑はれぬ事實であります。即ち兒供多ければ生計に困難を來し、生計に困難を來せば、終に殺生も爲ねばならぬことになつて來ます、妄語、綺語、惡口、兩舌と云ふやうな罪惡も、終に犯さねばならぬやうなことになつて來るのであります。然れば情なくも我が母は、我を養育するがために、唯苦勞するばかりでなく、亦時に種々の罪惡をも敢て造ることがあつたのであります。想へば誠に戰慄すべきことではありますまいか。

一四　遠行憶念の恩

(9)此の如き慈愛極まれる恩惠に依つて成長し、已に東西に奔走するやうになれば、我が母は亦我に隨つて其の心を東西に走らしめ、常に我を憶念して我を忘るゝことは、一分一秒間もないのであります。佛陀大悲の光明は、私共が如何なる處に走り回つて居る時でも、常に照して離れ給はぬ如く、我が父母の精神は我が子の趣く處に向つて、常に恒に離れぬのであります。假令海山萬里を隔てたる異邦に在るも、我が父母は常に我を憶念して異れるのである有ます、讀者諸君よ、世界に人多しと雖も、此の如く我を慈念して

一四、遠行憶念の恩

而も十年一日の如くなるのみならず、假令幾十年に及ぶも其の生命の有らん限りは、我を慈念して止まぬ者があります。私は我が父母を除いて外には、此の如き人は決して無いと信じて居るのであります。それ故愈以て、父母の恩の海よりも深きことを思はねばならぬのであります。

一五　究竟憐愍の恩

(10) 我が未だ此の世に生れざる先より、我を憶ひ續けて凡そ大となく小となく、我に幸なる吉事の有るあれば、父母は之れを自らの吉事として喜び、若し又我に不幸なる凶事災難の有るあれば、父母は之れを自らの災難として悲しみ

總べて我が兒の苦惱は、父母自ら之れに代らんとし、父母自身の快樂は、出來得る限り之れを我が兒に與へんとするは父母の實情であります。人間世界に於ては之れに勝れる憐念はありませぬ、之れを父母の究竟憐愍の恩と云ふのであります。

一六　父母山海の鴻恩

如上陳述しました恩惠は、私共が各自其の親より被(かぶ)れる山よりも高く海よりも深き父母の鴻恩であります。而して人類は此の廣大の恩に報ひる者が、果して幾人あるでありませう、殆んど皆無と云ふても可(よ)いかと思はれます。よし

一六、父母山海の恩

之れ有りとしますると、前に所謂棒大針小の報恩ではありますまいか、眞に棒大針小の報恩であります。棒大針小にても恩を知つて其の恩に報ひる者はまだ宜しいが、恩を受けて居ながら、其の恩を報ずるの意なき者、即ち前に言ふた如く、無形の恩を盜んだ盜賊の名を受くる者あるに至つては、實に言語道斷であります。之れに就て支那の善導大師が其の著『觀經義』の第二の中に、『父母恩重經』の意を以て左の如く示されてあります。

母の胎に懷み已つて十月を經るまで、行住坐臥常に苦惱を生じ、復產時死難を憂ひ、若し生じ已れば三年を經るまで、常に尿に眠り尿床に臥し、被たる衣服皆亦不淨

なり。其の長大するに及んで、婦を愛し兒を親しみ、父母の處に於ては、反つて憎疾を生じ、恩孝を報ぜざる者は、即ち畜生と異ることなし。

一七　動物と人類との親の恩

私は此の親の恩と云ふことに就いて、彼の動物に對して深く考へて見ねばならぬことゝ思ふのであります。上に引いた經文に依るに、親の恩を報ぜざるのみならず、反つて親を憎疾する者は、動物と異らぬと言ふてありますが、彼の動物界の中にあつても、下等動物を見るに殆んど親として子を愛するの情がないやうでありますから、養育の恩と

一七、動物と人類との親の恩

云ふものは無いと謂つても宜しいのであります。然るに高等動物に至つては、彼れ等は其の子を愛し、これを養育するの有樣を、現に牛馬雀燕等に就て觀るのでありますが、人類に等しと謂つてよいやうに思ふのであります。去れど之れを人類のそれと比較して見るに、其養育する時間は、僅に數月間に過きませぬ。多くとも一年餘であります。然るに人類はどうしても三年以上父母養育の恩惠を被らねば成長することは能ぬのであります。否實に少くとも七箇年間は、父母の養育を待たねばならぬのであります。故に人類は彼の動物にも比較すべからざる山海の恩惠を、其の親より受けて居るのであります。

更に人類中に於ても、中流以下と中流以上とを分けて考へて見るに、下流社會の者は、女子でも既に十歳位になれば、工場或は其の他に雇れなどして、自分の衣食は自分の力で之れを辨じ、父母の厄介にはなりませぬ。唯厄介にならぬばかりではなく、幾分の給金を得て、之れを以て父母の生活を助くるのが、殆んど貧民社會に於ける子弟の常例であります。然るに中流以上の者は何うでありませうか、中流以上の者に至つては、男子でもあれ女子であれ、約二十年間も父母に養はれざるを得ぬのであります、即ち男子ならば中學校以上の學校を卒業するまで、又女子ならば高等女學校を卒業するまでは、全く父母の力を被らねばならぬ

一八、親の恩は無邊なり

のであります。衣服も父母より之れを受けたのであります、飲食も之れを父母より受けたのであります、其他毎日の使用品は、鼻紙一枚に至るまで、親の恩賜で無いものは無いのであります。想ひ來れば誠に廣大無邊ではありませぬか

一八　親の恩は無邊なり

此の如く人類の被れる親の恩は、到底動物の蒙れる親の恩に比較すべきものでなく廣大無邊であります。更に人類中に於ても、中流以上の者の被れる親の恩は、下流社會の者の被れる親の恩よりも、大に異なれることを一考せねばなりませぬ。若しその養育に苦辛する程度より言へば、貧

困者の親の恩の方が重いと謂はねばなりませぬ。然しまた其の時間の長短より言へば、中流社會の者の被れる親の恩の方が、殊に重いと謂はねばならぬのであります。然し動物界は無論のこと、假令人類界と雖も、下流社會の者は恩であつて、恩を受けても其の恩を知ることは出來ないとも言はれませうが、中流以上のものに在つては、各自教育を受けて其の恩を受けたことを知つて居る筈であります。然るにこの中流以上の子弟であつて、親の恩を能く辨へ、而も之れに報ひんとする孝子が、此の世界中に幾人あるでありませうか、眞に曉天の星の如く少數であらうと思ふのであります。

一九　君主の恩

(二)君主の恩。現今の亞米利加合衆國の人民の如きは、定めて君恩と云ふ考がないでありませう。否遠く亞米利加人を持ち來らずとも、我が日本國の人民中でも、彼の社會主義を主張するやうな者や、又は平民主義を鼓吹するやうな者は、此の君主と云ふ感じが頗る微溺であるやうに思はれるのでありまず。此の如きは社會協同力の偉大なる一方のみを見て、君主の威嚴の偉大なる一方を忘れたるものであります。然れば苟も佛教を奉ずる者は、斷然彼の社會主義などの説に耳目を借すことを止めて、釋迦牟尼世尊の教

勅の如く、唯だ偏に君恩の廣大なることを思ひ、謹んで其の洪恩に報ひ奉らんと、努力するやうに致したいものであります。之れに依つて私は、釋迦牟尼世尊が『心地觀經』の中に、君主の恩德を十條に分けて、説き示し給へるものを左に紹介して置かうと思ふのでありまず。

二〇　君主の十恩

(一)君王を能照と名づく、智慧の眼を以て能く國家を照鑑するが故なり。

(二)君王を莊嚴と名づく、文武の道を以て能く國家を莊嚴するが故なり。

二〇、君主の十恩

(三)君王を興樂と名づく、安樂の法を講じ以て之れを人民に與ふるが故なり。

(四)君王を伏怨と名づく、若し怨敵あれば能く之れを降伏するが故なり。

(五)君王を離怖と名づく、能く國民を保護し諸の恐怖を離れしむるが故なり。

(六)君王を任賢と名づく、能く國の賢者を集めて國事を評せしむるが故なり。

(七)君王を法本と名づく、國民の安寧は國王を以て本とするが故なり。

(八)君王を持世と名づく、國家を維持するは全く君王の力

なるが故なり。

(九)君王を業主と名づく、國家の事業は皆君王に依つて之れを作すが故なり。

(十)君王を人主と名づく、國民多しと雖も皆君王を以て主となすが故なり、

二一　十德圓滿の君主

今の世に在つて、如上の十德を圓滿具足したまへる君主が、果して世界萬國の帝王中に、幾人在しますでありませうか、私は我が大日本帝國の大君より外には眞箇此の如き十德を具へ在します帝王は、在しまさぬであらうと思ひま

二一、十億國民の君主

す。獨り我が大日本帝國の大君に限り、釋迦牟尼世尊の豫記して說き置き給へる、此の君王の十德を具くも圓滿具足して在し給へることを、深く信じて疑はぬのであります。而も之れは無暗矢鱈に信ずるのではなく、既に事實となつて現はれて居つて、覆ふべからざることでありますから、之れを疑はうとしても、疑ふことが出來ぬのであります。而も其の事實は日清戰爭以後に至つて漸く現れ、又近頃の日露戰爭に依つて、愈益其の事實を拜觀し奉つたのであります。依つて私は畏れ多くも我が　天皇陛下の御威德を讃者諸君の前に讃嘆し奉らうと思ふのであります。

二二　今上陛下の御盛德

(一)今上天皇陛下には常に大御心をもて國內臣民の狀況を照鑑し給ふことは、今更申し上ぐるまでもないことであります。(第一德)

(二)而も又文武二道の主權者として君臨し給ひ、能く國家を莊嚴し國威を宇內に輝し給ふことも、亦申し上ぐるまでもないことであります。(第二德)

(三)唯外に向つて國威を輝し給へるのみならず。又內に向つて國家安寧の法を講し給ひ、國民に大安樂の生活を與へ給ふとも、今や萬國に其の比を見ざるなと申さね

二二、今上陛下の御盛德

ばなりませぬ。(第三德)

(四)唯内治に大御心を配らせ給ふのみならず、若し外寇の來らんとするものあれば、之れを未發の中に防ぎ給へることは、先きの日清戰爭及び今度の日露戰爭に徵するに、誠に明なことであります。(第四德)

(五)然のみならず　陛下の御威光に依りて、國家百般の經營事業は益進歩し來り、今や昔時に比較するに、火難水難、盜難並に流行症等の災難は、著しく減少して來たやうに伺ひ奉るのであります。(第五德)

(六)然しこれと申すも、我が　陛下が憲法を制定し給ひて國會を開設し、人才登用の道を開いて、國事を議せしめ給ひし結果と伺ひ奉るのであります。(第六德)

(七)依つて我が　天皇陛下は、國民安寧の本尊にて在しますと、仰き奉るのであります。(第七德)

(八)去れば我が國家は、全く　陛下の御威光に依つて維持されて居ると、申し上げねばならぬのであります。(第八德)

(九)隨つて私共人民としての個人的職業も、大にしては國家經營の大事業も、皆な　陛下を主として爲すことを得るのであります。(第九德)

(十)依りて我が日本人民たる者は、一人として我が　天皇陛下を君主として仰がざる者は無いのであります。寇

二二、今上陛下の御盛德

二二、今上陛下の御盛德

に我が　天皇陛下は日本人民全體の大君であります。又全世界の諸帝王に超え勝れたる盛德を具へ給ふ所の大君主であります。（第十德）

此れに依つて之れを觀るに、釋迦牟尼世尊が昔印度に在つて、說き示された所の君主の恩德は、遙に我が日本國の今日の人民が、今日の　天皇陛下より被れる恩德を、說示せられたのではあるまいかとの感を惹起するのであります。孰れにしても外國の人民に異り。日本人民は殊に君恩の尊きことを、能く思はねばならぬのであります。更に又佛敎家たる者は、他の非佛敎家の人よりも、此の釋迦牟尼世尊の敎勅に隨ひ、一層君恩の尊きことを忘れぬやうに致さねば

なりませぬ。即ち父母の恩義に對しては孝子となり、君主の恩義に對しては忠臣たらんとするものにあらざれば、日本人民にあらざると共に、又佛敎徒ではないのであります

二三　社會の恩

（三）社會の恩。佛敎の中には社會と云ふ術語は有りませぬ、隨つて社會の恩と云ふやうな說の有るべき筈も無いのであります。然し佛敎中には盛んに衆生恩と示ふことが說いてありまして、『心地觀經』などにも、衆生恩と云ふのを以て、父母の恩や君主の恩と同等のものとして、殆んど其の間に輕重の別をも見るべからざるものゝ如く說いてありま

す。此の衆生恩と云ふのは、今日の通用語を以て言へば、即ち社會恩と謂ふべきものであります。元來衆生とは生物全體を指すのでありますけれども、暫く其の範圍を狹めて人類界に限り、人類全體を呼んで衆生と見て置いても宜いのであります。而して其の衆生は皆な私共の恩人で、私共は御互に、世界の人類よりも多少の恩惠を蒙らぬものは無いと云ふのが、即ち衆生恩でありますから、衆生恩は社會恩と改名してもよいと思ふのであります。

二四　佛教より見たる社會恩

私共は、社會の人類全體の上より、如何なる恩惠を蒙り

つゝあるかと云ふに就て、佛教特種の見解と普通一般の說明と、大に二樣ありと思ふのであります。先づ佛教特種の見解より言へば、凡そ宗教と云ふものは、一般に私共人類を以て、現在一世のみに限るものと見ずして、私共人類を以て永遠の存在と見るのであります。而も我が佛教にあつては、唯將來に向つて永遠の存在と考ふるのみならず。又過去の方面に向つても、永遠の存在と云ふ考を以て居るのであります。既に其の生の初無くまた滅の終なく、無始無終の長途にわつて、舊來轉生相續しつゝあるものであるから、轉生する毎に必ず父と恃むべきものと、又母と恃むべきものとあるは無論のことであります。然らば其の無始の

太古に向ひ、大活眼を開いて之れを觀れば、世界は多數の人類ありと雖も、無限の時間と無限の轉生とを以て之れを考ふるに、凡べての男子は曾て或は父と恃み、或は兄弟朋友と爲したこともあるものと、謂はざるを得ぬのであります。又た凡べての女子は曾て或は母と恃み、或は姉妹親戚と爲したことも有る者と、謂はざるを得ぬのであります。若し此の考を以て觀れば世界に仇敵はないので、よし一時仇敵たるべき者であつても、無始と云ふ太古に向つて之れを逆觀して見れば、世界の人は舊時の父母で無ければ、兄弟姉妹であつたのであります。果して父母たり兄弟たり姉妹たるべき者であつて見れば、隨つて舊恩の大なるものあ

るを想ふに足るので、現在の父母兄弟に於けるが如く、曾て洪恩を被つて居るものと謂はねばならぬのであります。之れに依つて世界の全體の人類にして、互に世界全體の人類より、恩惠を負ふて居らぬ者は、一人もないと謂ひ得るのであります。されば何人に係らず世界の人は、現在骨肉の關係ある父母兄弟に次いで、或は敬し或は愛し、以て舊恩に報ひる志あると共に、又其の行なくんばあるべからずとは、佛教特種の見解であります。而して佛教以外にはまだ此の如き廣大な考を以て居るものは、恐らくは無いと思ふのであります。

二五　普通の説より見たる社會恩

次に普通一般の説明と言ふたのは、普通一般の生活問題に就ての解釋であります。凡そ私共の生活は自力でありませうか、又他力でありませうか、語を換へて之れをいふと私共は全く自己の獨力を以て生活することが出來るものでありませうか、又私共は社會協同の力に依つて、生活することを得るのでありませうか。先づ一往之れを觀れば、私共の生活は自己の獨力のやうに思はれます。即ち私共の生活に必要なる衣食住は、全く自己の勤勉に依つて得るものであつて、他人の關はるべきものでないと云ふ、獨立自衛

の原則より之れを考ふれば、私共の生活は全く自己の力であつて、社會公衆の秋毫も關係すべき筈のものではありませぬ。然しながら更に轉つて其の裏面を考ふるに、私共の生活は社會全體の力を藉りて初めて其の生活を經營することを得るのであります。若し社會公衆の力を藉らなかつたならば、私共は寒さを防がんとするも、衣服を得るに由なく、飢を凌がんとするも、食を得るに由なく、居を求めんとするも、家屋を得るによしなく、畢竟人類としての生活を、經營することが全く出來ないのであります。よし唯だ獨り自力を以て生活し得るとしても、其の生活たるや深山幽谷に棲む所の狐狸熊羆の類に等しき生活であつて、決し

て其れ以上人並の生活は出來ぬのであります。即ち天然物より外のものは着ることも食ふことも用ふることも出來ませぬから、全く狐狸熊羆の群に入つて生活するより外はないのであります。

二六　絶待的獨立の不可能

茲に實例を以て、絶待的獨立の不可能なることを說きませうか。世には己れ自ら耕して食ひ、自ら織つて着るのであるから、我は社會の恩惠を被つて居らぬと云ふ者も、或は有るかも知れませぬ。然し私は然う云ふ人に向つて一二反問して見たいのであります。

『汝が自ら耕するに當り、何を以て耕しましたか。鍬と鎌でありますか。其の鍬と鎌とは汝が自ら造つたのでありますか。市から買つたと言はれますか。市に買ふべく行く時に裸で往きましたか。笠を被むつて、着物を着て、草履を穿いて、御錢を持つて買に往つたと言はれますか。然らば汝は其の笠と着物と草履と御錢とは、皆な自分で造つたものでありますか。草履は自分で造つたのであるけれど、其の他は皆な自分の手で造つたのではありませぬと言はれますか。それなら汝は自ら耕して食ふと言はれますけれど、先づ其の耕をするまでに、他人の力を被つて居るのではありませぬか。』

二六、絶待的獨立の不可能

此くの如く僅に二三問にして、此の人は全く自己の力のみでは、到底生活することは出來ぬことを自覺して、默して仕舞ふのであります。斯く私共は絶待的に獨立自術と云ふことは不可能と同時に、私共の生活は自力と共に他力を待たねばならぬもので、其の他力を待つと云ふ所が、社會全體、全體の恩惠を被むる所であります。依つて私共は社會全體の人類、見たことも聞いたこともない人より、自分で知ることの出來ぬ恩惠を被つて居るのでありますから、私共は亦この社會恩に報ひるために、社會の人類に對して便益あるやうに、自分々々の職務を專心勉勵せねばならぬのであります。

二七　報恩的活動

以上人生の三恩を辯述致しましたが、この人生の三恩に對して、宗教の方面に於ても佛教では、佛と法と僧との三寶の恩と云ふことを申しますが、これは次の人生の三寶と云ふ題の下で、陳べたいと思ひますから今は申しますまい。要するに私共は父母の恩を蒙むると共に、國家としては君主の洪恩に浴し、又社會としては公衆全體の恩惠に預りつつあると云ふことは、單に道理上から推すのではなくて、全く事實の上に於て否することの出來ぬと云ふことは、如上の辯述に依つて明瞭なことであらうと思ひます。故に私

共は自分が自分であつて、而も自分でないと謂つても宜いやうに、諸方面よりの恩惠によつて、今日生存しつゝあるのでありますから、私共は其の洪恩を盜まぬやうに、成るべく報恩の誠を以て活動せられたいのであります。尙ほ私の謂ふ所の報恩的活動と云ふをは、自分々々の持つて居る職務に向つて、畢生の間全身を提げて、誠心誠意に勤勉力行することであります。

第九　人生の三寶

一　寶とは何ぞや

此に人生の三寶と云ふ題で陳べて見やうと思ふのでありますが、先づ第一に其の寶と言はるゝ物から定めて置かねばなりませぬ。然らば寶とはどんな物かと云ふに、世間一般に寶として認めて居るものは、世に最も稀な物を呼んで、寶と云つて居るので有ます。例へば古き建築術に依つて建てられ、而も古き美術思想を充分に現してある神社や佛閣及び其の神社や佛閣に藏して居る、所謂寶物と云ふ物は、世上最も稀な者でありますから、寶と謂はれて居るのであ

ります。又己れの最も重愛する物を呼んで、寶と云つて居るのであります。例へば骨董家が古器物を愛し、或は文人墨客が書畫を愛して寶として居るのは、己れが最も愛するよりして、寶として居るのであります。又己れに最も有益なる物を呼んで、之れを寶として居るのであります。例へば一般に金錢を以て寶として居るのは、金錢は己れに最も益ある物でおるからであります。

二　五種の三寶

今私が人生の三寶と言ふ寶は、即ち初め二種の意味に於ける寶ではなくて、第三種の意味に於ける寶であります。

乃で其の第三種の寶に屬する物の中でも、古人が其の見解を異にして居つて、茲に大凡四人の說があります。之れに私の考案した所の三寶を加へて、五種の三寶があるのであります。即ち

(一)平和の三寶……太田錦城の所謂三寶。
(二)國家の三寶……孟子の所謂三寶。
(三)道德の三寶……老子の所謂三寶。
(四)宗敎の三寶……佛敎の所謂三寶。
(五)成功の三寶……吾人の所謂三寶。

でありますから、之れより順次に辯じて見やうと思ふのであります。

三　平和の三寶

〔一〕平和の三寶。今より八九十年以前、世は德川幕政の盛んであつた頃、北陸加能越の三箇國を領して居つた金澤藩に、太田錦城と云ふ大儒がありました。當時天下第一の大藩たる、三萬石の大名に抱へられて居つた人だけあつて仲々博學達識な名儒でありまして、殊に篤行の君子でありました。此の人の著述中に、『梧窓漫筆』と云ふ隨筆ものでありますが、三篇に分れて居つて各上下二卷となつて居る書物であります。其の第一篇の上卷に、所謂この人の三寶が載せてあります。

予ガ幼少ノ時、老人ノ話ヲ聞シニ、世ハ三寶ニテ治レリ、女房、鐵砲、佛法ナリト云ヘリ。當時ハ理アル言トモ思ハザリシニ、今日能々此言ヲ味テ、其妙ヲ悟レリ。女ハ人ノ氣ヲ和柔ニシ、且ツ妻子ニ羈サルヽ故、恐ビ難キヲモ恐ベリ、若シ妻子モナキモノナランニハ、恐怒ノ爲メ人ヲモ打果スモノ少カルマジ。佛法モ慈仁柔弱ヲ以テ說ヲナシ、地獄天堂ナドノ談ニテ、世間ノ亂ヲ止ムルコト少カラズ。念珠ヲ揑グリ、觀音ヲ伏シ拜ム人ハ、人ト打チ合フコト少カルベシ。是ニテ其大功ヲ悟ルベシ。鐵砲ナキ時ハ、武暴猛勇ノ人涯ナク横行スベシ、劍術モ槍法モ、此ニテ打碎カルヲ以テ、武勇ノ人モ手ヲ束テ、

三、平和の三寶

其惡ヲ肆ニスルコトヲ得ズ。不仁ノ器ニシテ又大位ノ用ヲ爲セリ。何レニシテモ此三寶ニテ、人ノ心ヲ和柔ニシ、天下ノ太平ヲナスモノナリ。

此れに依りて之れを觀れば、此の三寶も太田錦城自身の考ではなく。彼が幼少の時代に或る老人より聞いた話を、彼の隨筆中に記して、彼自身の贊成して居る說であるとして居るのであります。然し旣に彼は其の隨筆中に此れを錄して居ることであるから、之れを太田錦城の所謂三寶としても差支はなからうと思ひ、而も私は之れに平和の三寶なる名を與へたのであります。

四　家庭と國家との平和

凡そ家庭の平和は何に依つて得るのでありませうか、私の考を以てすれば、家庭の平和は無論男子も關係はして居りますけれども、先づ婦人の力に依つて得るものであると思ひます。即ち家庭の平和を得るには、男子よりも寧ろ女子の力を藉りた方が、其の功果が勝れて居ると云ふことは、眞に爭はれぬ事實であります。依つて家庭の平和に取つては、女房が一の寶であると謂つて宜いのであります。近時女子教育の盛になつて來たのも、全く此に存するのでありますから、世の女子自身も、亦此の點には大に責任を持た

ねばならぬのであります。又此の家庭より延びて、社會の平和を持つには、宗教の力も亦實に偉大なものであります錦城が「念珠を揑ぐり觀音を伏し拜む者は、人と聯合ふこと少かるべし」と言つたのは、眞の事實であります。佛を信じ神を信ずる者は、その心自ら平和であつて、慈仁の方に傾いて居りますから、人類相互の間にあつて、平和を持ち、衝突を避くるの功は、頗る廣大なものであると云ふことも亦疑ふことの出來ぬ事實であります。然るに植物の中にあつて惡草を斷つ能はざるが如く、又動物の中に在つて毒蟲を滅する能はざるが如く、人類の中に在つても亦社會の平和を破る兇賊を全滅することは、容易に望まれぬのであります。隨つて其の兇賊を征するために、鐵砲なる武器も頗る必要なものでありますから、私も錦城の三寶を人生の三寶中に、引き來たつたのであります。

五　國家の三寶

〔一〕國家の三寶。今より二千二百年ほども前に當つて、支那の國に孔子の教を擴めた所の孟子と云ふ人がありまして、其の人の書かれた書物をまた『孟子』と言つて居りますが其の中に孟子の所謂三寶の說が載せてあります。即ち『孟子』盡心章下に

諸侯に三の寶あり、曰く土地と人民と政事と是なり

珠玉を以て寶と爲す者は、禍必ず其の身に及ぶ。

とありますから、私はこれに國家の三寶なる名を與へたのであります。此に孟子が諸侯と言つたのは、昔の所謂大名のをでわつて、今日にあつて之を謂ふならば、國家と代へて見れば分るのであります。而して其の國家の寶とすべきものは土地と人民と政事とであつて、珠玉の如きは寶とするに足らぬと云ふのが、孟子の議論であります。是れは孟子が當時の諸侯に於ける、驕奢贅澤を誡めたものでありまして、今日の國家に就いて考へましても、國家第一の寶は土地であります。古來國家の戰爭は何に依つて起つて居るかと云ふに、多くは土地が爭の本となつて居るやうであります。近頃の日露戰爭でも、滿洲と云ふ土地が本となつて揣らずも幾十万の兵士を、戰場に葬ることゝなつたのであります。かく其の土地が國家必要の寶でありますが、しかし如何に土地がありましても、若し人民がなかつたならば折角の土地も荒地となつて、何等の用をも爲しませぬ。又如何に人民がありましても、善政を以て其の人民を統治しなかつたならば、折角の人民も國用とならずして、反つて國害を釀すやうにならぬとも申されぬのであります、而して古來國家の滅亡する例は、皆善政を以て人民を統治することか出來なかつた結果であります。故に孟子の說の如く土地と人民と政治とは、國家有用の寶でありますから、私

は之れを引き來つて、人生の三寶中に加へたのであります

六　道德の三寶

〔三〕道德の三寶。先の孟子よりも尙ほ百年程以前に、支那に老子と云ふ大聖人が有ました。この老子は孔子聖人よりも少々先輩で、孔子も若き時多少の敎を受けられたと傳へて居りますから、其の如何に高德であつたかを想像するに足るのであります。而してこの老子が自ら書いたのでもありますまいが、兎に角老子の說を集めたものがありまして、其れを『老子經』と云ふて居ります。其の中に左の如くありますから、私は之れを老子の三寶として出だしたのであります。

我に三寶あり、持て之れを寶となす。一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢て天下の先と爲らず。慈なるが故に能く勇、儉なるが故に能く廣、敢て天下の先と爲らざるが故に能く器の長となる。今や慈を捨てゝ且つ勇ならんとし、儉を捨てゝ且つ廣ならんとし、后を捨てゝ且つ先たらんとするは、既に死せりと謂ふべし。夫れ慈以て戰ふ時は則ち勝つべし、以て守る時は則ち固かるべし。天は將さに之れを救はんとするに、慈を以て之れを衛るべし。

七　老子と孔子と釋迦の道德

此の老子の三寶には、實に無限の意味が含んで居ると信じ、老子聖人の人格も、之れに依つて想察することが出來ると思ふのであります。多くの人の眼中は、老子聖人と孔子聖人とは、其の人と爲りの上に於て、大なる相違あるやうに見られて居りますけれども、此の文に依つて見れば二人の主義とする道德に於て、殆んど一致するものありと謂つて宜いやうに思ひます。依つて太田錦城も、此れに就いて左の如く說いて居るのであります。

老子ノ三寶ハ慈仁ナリ、儉約ナリ、不敢爲天下先トイ

フハ恭儉ナリ。人コノ三寶ヲ失ハサレバ、修身安穩ナルヘキコトナリ。孔子ノ溫良恭儉讓モ三寶ニ同ジ、溫良ハ慈仁ノ發ナラズヤ、儉ハ即チ儉ナリ、恭讓ハ不敢爲天下先ナリ。

獨り孔子と其の主義を同うするのみならず、釋迦も幾んど其の主義を同ずるものありと謂つて宜いのであります。然らばこれは釋迦、孔子、老子の三人一致の三寶でありますけれども、今は『老子經』中に出て居る造語でありますから之れを以て老子の三寶とし、而も私は之れに道德の三寶なる名を與へたのであります。

八　道德の根底

扨て此の道德と云ふものは、實に千差萬別であります。例へば子として親に向へば親に對しての道德あり、親として子に向へば、子に對しての道德あり。又妻として夫に向へば、夫に對する道德あり。夫として妻に向へば、妻に對する道德あり。又臣として君に向へば、君に對しての道德あり、君として臣に向へば、臣に對しての道德ありと云ふやうに、道德の種類は其の相手に依り、又其の事柄に依り頗る繁雜なものでありまして、一概に斯うと極められ得るものではありませぬけれども、百般の道德の根底を求むれ

ば、一の慈にありと謂つて宜からうと思ひます。即ち精神上の根底に一の慈の存するあつて、是より發動し來れる行爲であるなれば、總べて道德であると謂つて宜しいと思ひます。又之れに反して、若し精神上に慈の全く欠乏して居るならば、其の行爲の如何に係らず、道德と稱すべき價値はありませぬ。若し慈と云ふ字を挾き意味に見て、上に在る者が、下に居る者に對する時に限るとすれば、慈を以て百般の道德の根底とする譯には參りますまいが、若し廣き意味を以て之れを見れば、慈は決して上たる者が、下たる者に對する時に限るのではなくて、總べて己れ以外の者に對し、己を忘れて他を願る忠恕の心は、皆悉く慈でありま

すから、慈は百般の道德の根底であると申して宜いのであります。

九　慈仁の寶

前に擧げし如く老子聖人が、我に三寶ありと云ふて、其の一の寶に慈を數へたのは、實に無限の味があると信ずるのであります。前に述べました如く、慈は道德の根底でありまして、この慈が根本となつて、他の諸の道德的行爲が現れ來るのであります。例へば私共の運動の根本は、一に腦髓にありと謂つて宜いやうなものであります。私共の手を動かすのも腦髓の力であれば、私共の足を動かすのも亦

腦髓の力であります。眼を以て物を見るのも腦髓の力であれば、耳を以て聲を聞くのも亦腦髓の力であります。其の他私共の一擧一動は、皆悉く腦髓の力を籍りて居るのであります。此の如く其の運動の根本を求むれば、一の腦髓の力であるにも係らず、外部に現れた動作を見れば、千態万樣に分れ來るのであります。今私共の道德も其の如く、其の行爲を見れば、實に千差万別でありますけれど、其の根底を求むれば、一の慈仁にありと謂つて宜いのであります。然しながら動もすると、慈には怯弱の弊があるやうに思ふ人も有りませうが、これは老子も『慈なるが故に能く勇』と言つて居ります。即ち慈仁を以て根底として居る道德であれ

ば、之れを爲すに必ず勇氣があります。例へば根有る草木には何となく勢の有るやうなものであります。之れに反して慈仁の根底無き道德は、假令之れを爲すも、その心に勇氣がありませぬ。例へは根を斷たれた草木は、假令其れに美しき花を持つて居つても、何となく勢のないやうなものであります。尙は近く例を取つて示せば、繼母が子を育つるには、慈悲の根底が欠乏して居りますから、勇氣がありませぬ。然るに實母の子を育つるには、確乎たる慈悲の根底がありますから、十年二十年一日の如く、勇氣の繼續する所あつて、いつ〳〵までも挫る憂はないのであります。依つて『慈なるが故に能く勇』と老子が言ふたのは、實に名言であります。

一〇、節儉の寶

次に第二の寶を儉と言つたのも、亦大なる意味を含んで居るのでありまして、儉は儉約のことで、即ち節儉を守ることであります。節儉は奢侈の反對であります。乃で道德上節儉の必要なることを知らんとするには、先つ奢侈と比較して其の得失を考へ、又吝嗇と比較して其の意味の相違して居る所を考へねばなりませぬ。凡そ奢侈と云ふものは小にして之れを言はゞ其の身を亡し、中にして之れを言はば其の家を亡し、大にして之れを言はゞ國家を亡ぼすもの

であります。假令幾万の資產を有して居る人でも、奢侈に流れて滅亡しないものは、恐らく一人もありますまい。身を亡ぼし、また家を亡ぼし、また國家を亡ぼすにつき、この奢侈ほど恐るべきものはないので、隨つて奢侈は道德と相容れぬもので、古人でもれ今人でもれ、奢侈に流れて居る者で、未だ曾て忠臣たる者もなく、孝子たる者も無いのであります。又貞女なる者もなく、慈善家なる者もないのであります。然るに節儉家であつて忠臣義士たる者あると共に、孝子節婦たる者のあること、及び博愛的慈善家の出つることも、古今を問はず隨分珍しからざる程澤山あるのであります。たゞ珍しからざるのみならず、多くの忠臣義

士、孝子節婦たる者は、必ず節儉を守つた者であつたのであります。故に節儉は、小にして之れを言はゞ、身を立て德を行ふの本であつて、中にして之れを言はゞ、家を興し道を弘むるの本であります。又大にして之れを言はゞ、國を築へしめ德を立つるの本であります。

然るに動もすると、此の節儉と吝嗇とを混同し、節儉の弊は吝嗇に陷り易いのであります。けれども節儉と吝嗇とは、決して之れを混ずべきものではなく、寧ろ正反對の意味を有つて居るのであります。即ち節儉は己の所用を成るべく儉約して、其の代りに成るべく人に惠むやうにするので、孔子の所謂節儉の美德を賞めて、『用を節して人を愛す』

と申された如くするのであります。然るに吝嗇とは之れに反して、唯財を己に集むることのみを知つて、他の利益を圖り、或は之れを惠むことを、全く知らぬ行爲を云ふのであります。依つて吝嗇と節儉とは、相似たるが如きものであつて、而も相容れぬ所のものであります。されば太田錦城も左の如く之れを辨じて居るのであります。

儉ハ孔子ノ宜ル節用愛人ノ義ナレトモ、末世儉ヲ主張スルト人々皆吝嗇ニナリテ、己ニ私スルノ欲バカリ燃ニナリテ慳貪甚シク、奢侈ノ人ノ尙ホ他ヲ惠ミ、人ヲ賑フノ氣習アリシニハ、遙ニ劣レルコトナリ、是レ奢侈ノ美ナルニハアラズシテ、儉ノ方ヲ失ヒタルナリ、不德甚シ

トカク儉ハ自ラ己ノ節約ニシテ、成ルベク人ヲ賑ヒ惠ムコトナリト心得ベシ。

然れば道德上吝嗇は最も厭ふべきものであつて、又奢侈と共に最も忌むべきものであります。凡そ人は儉なる所あつて道德上頗る必要の寶であります。其の替りに節儉は初めて總べての道德を廣大にすることが出來るのであります。故に老子は『儉なるが故に能く廣』と申されました。私共が若し儉なる所がなければ、身を立て德を行ふことを廣大にすることが出來ませぬ。又私共が若し儉なる所がなければ、家を興し道を弘むることを、廣大にすることが出來ませぬ、又私共が若し儉なる所がなければ、國を榮えしめ德

を立つることを、廣大にすることが出來ぬのであります。それ故に一歩たりとも進んで儉を守れば、老子の言はれた如く、身を立て家を興し、國を榮えしめ德を立つることを廣大にすることが出來るのであります。

一一　謙讓の寶

次に道德上第三の寶としては、『敢て天下の先と爲らず』と云ふことで、即ち之れは謙讓の寶と謂ふべきものであります。此の謙讓も亦道德上無限の味を含んで居るのであります。而して前の節儉を以て直に道德であるとは言ひ難ぬる邊もあるでありませうが、この謙讓も亦之れを以て、直に

道德であるとは言ひ難い邊もあるのであります。然し道德者には必ず謙讓の美風を具へて居るので、謙讓の有る所には必ず道德ありと云ふことは出來得るのであります。何れにしても、謙讓と道德とは、相離れ難き關係を有つて居るのであります。謙讓と傲慢と比較して見たならば、容易に其の邊の趣を知ることが出來やうと思ふのであります。

扨て傲慢とは唯己在ることのみを知つて、他に人在ることを知らぬ態度を示す者を云ふのであります。假令他に人在ることを知つても、唯己を以て先とし、己を以て是とし己を以て高くし、他を後とし、他を非とし、他を卑くして顧みざる者が、即ち傲慢と云ふものであります。老子は『敢

て天下の先と爲らず』と申されましたが『敢て天下の先たらん』とする者は、所謂傲慢の人であります。此の如き傲慢の人にして、而も道德者と云ふことが出來得るでありませうか恐らくは斯る傲慢の人を以て、道德者と言ふことは出來ませいと思ふのであります。親を親とせざるは何が本となるのでありませうか、又君を君とせざるは何が本となるのでありませうか、是れ皆道德に背いた傲慢の心が本となるのであります。然らば人はこの傲慢だにわらば、忠臣孝子たらんとするも、忠臣孝子となることが出來ず、曾に忠臣孝子たる能はざるのみならず、總ての道德的行爲を實現しやうと思ふても、道德と傲慢とは兩立し難きものでありますか

ら、到底不可能の業であります。

之れに反して、謙讓とは人有るを知つて、己あるを知らぬと云ふ態度が自然に現れるのでありますから、假令己有るを知るも、人を先として己を後となし、人を是として己を非となし、人を高くして己を卑くし、萬事に就いて其の功を他に讓つて、己之れを待たざる所が即ち謙讓であります。

それ故に私共が此の謙讓の心を以て父母に向へば、父母の恩義に感ぜざるを得ぬことになつて參ります。又此の心を以て君主に向へば、君主の恩義に感ぜざるを得ぬことになつて參ります。又此の心を以て社會に向へば、社會の恩義

に感ぜざるを得ぬことになつて參ります、隨つて諸方面に對する道德は、此の謙讓の心より發生するのであります。依つて此の謙讓の心あつて道德者たらざる者は、殆んど無いと謂つて宜い位のことであります。

然のみならず、能く之れを考へまするに、傲慢は其の實己を高くするのではなくて、却つて己を卑くするのであります。即ち己一歩傲慢なれば、それ丈人に輕蔑せらるゝのであります。語を換へて之を言へば、己敢て人の先たらんとすれば、却つて人に退けられ、己人の後たらざるを得ぬ樣になつて來るのであります。又己人の長たらんとするも長たることを得るは、頗る六箇敷のであります。之に反し

謙讓を以て人に向へば、己敢て人の先とならざるも、人は却つて己を先として呉れ、己を頂き己を長として呉れるやうになつて參ります。老子が『敢て天下の先とならざるが故に、能く器の長となる』と申したのは、眞に名言であります。

一二　道德上の死人

如上老子の所謂三寶を、大略辨述したのでありますが、老子は之れを『自ら持つて寶とす』と云ひ、大に之れが實行を期して、以て寶として居られたのであります。而して其の後に『慈を捨てゝ且つ勇ならんとし、儉を捨てゝ且つ廣ならんとし、後を捨てゝ且つ先たらんとする者は、既に死せり

と謂ふべし」と云ふて、此の如き人は即ち道德上の死人であると斷言せられたので有ます。更に『慈以て戰ふときは則ち勝つべし、以て守る時は則ち固かるべし、天は將に之れを救はんとするに、慈を以て之れを衛るべし』とて、三寶と三つに分つては說いたものゝ、道德の根底は一の慈に在りと定め、此の慈を以て結んだのであります。私は此に老子の三寶、即ち道德の三寶を說き來つたけれども、大に慚愧せざるを得ぬのであります。即ち私は儉の寶も缺いて居りまず。されどそれよりも尙ほ缺いて居るのは、第一の慈の寶と、第三の謙讓の寶であると思ひます。然し私は之れを陳ぶると同時に道德上の死人となつて仕舞はず、之れより益

此の三寶を持して、失はぬやうに修養したいのであります。

一三　宗敎の三寶

〔四〕宗敎の三寶。此に宗敎の三寶と云ふのは、即ち佛敎の三寶を謂つたので、佛敎に在つては佛と法と僧との三を呼んで、佛敎の三寶として居るのであります。而して之は既に宗敎の三寶でありますから、無宗敎の人に在つては、寶と謂つべきものではありますまい。又宗敎の中に於ても既に佛敎の三寶でありますから、非佛敎の人に在つては、寶と謂つべきものではありますまい。然し今人生の三寶を說くに當り、道德の三寶に對して宗敎の三寶を說く必要わ

一三、宗教の三寶

りと思ふのであります。

扨て佛教の門内に在つては、佛法僧の三を無限の寶として、世間の金錢財物等を以ては、到底償ふべからざる重寶であるとして居るのであります。凡そ佛教廣しと雖も、其の要を取つて之れを言はゞ、佛と法と僧との三より外はないと云ふ所よりして、この三を以て寶としたのでありませう。然らば其の佛とは如何なるもの、法とは如何なるもの、又た僧とは如何なるものであるかと云ふに就いては、種々込み入つた說明があるのでありまして、容易に之れを語り盡す譯には參りませぬ。然し佛と法と僧との三を合して、三寶とするに至つた原始に就いて之れを考ふれば、敢て六

箇敷と言ふ程のをでも無からうと思ふのでありますから、其の源始に溯つて之れを少しく陳べて見やうと思ひます。

一四　佛寶

先づ第一に佛とは何者かと云ふに、世界の大導師であつて、私共を惡しき道より善き道に誘ふて下さるゝ御方であります。若し私共を以て無眼者とすれば、佛は有眼者でありまして、無眼者の依賴すべき寶は、實に有眼者であります。又私共を以て病人とすれば、佛は良醫であります。又私共を以て病人の依賴すべき寶は、實に良醫であります。又私共を以て重罪人とすれば、佛は救世主でありまして、重罪人の依

頼すべき寶は、實に救世主であります。又私共を以て乳兒とすれば、佛は慈母でありまして、乳兒の依頼すべき寶は實に慈母であります。佛教に所謂佛とは斯る御方を謂ふのでありますから、私共佛教徒より佛を寶として尊敬するのであります。而して其の佛とは即ち釋迦牟尼如來を指して居るのであります。

一五　法寶

次に法とは前に説きました佛が、私共を悪しき道より善き道に誘引して下さるゝ所の教訓で、即ち釋迦牟尼如來の善言嘉訓を、法と謂つたのであります。それゆゑ私共を以

て、重病人とすれば、法は良藥でありまして、重病人の持つて寶とすべきものは良藥であります。又私共を以て飢渇に泣く者とすれば、法は即ち甘露の淨水でありまして、渇に苦しむ者の寶とすべきものは、實に此の甘露の淨水であります。又私共を以て貧窶に逼る者とすれば、法は資財の如きものであつて、貧窶に逼る者の寶とすべきものは、實にこの資財であります。依つて佛教徒はこの法を無上の寶として、服膺するのであります。

一六　僧寶

第三に僧とは、前の佛を信ずると共に、又前の法を信じ

て、其の法の如くこれを實踐躬行して止まざる者の稱號であります。即ち佛を信じ佛に歸依すると共に、又其の佛を學びて、一歩たりとも佛に近かんと欲し、身も心も惡を止めて善を爲すことにのみ從事して、日夜懈怠なき者は皆この僧と謂つて宜いのであります。去れば僧とは形に就いた名稱ではなくて、行に就いた稱號であります。若し其の形の僧に就いて云ふならば、或は僧侶中にも世の寶となる、價値を有して居る者は無いでありませうが、其の行に就いて云ふのでありますから、眞に寶とすべき價値があるのであります。尤も現時の僧侶が、僧寶と言はるべき行を有して居るや否は別問題であります。然し其の行に就いた所謂

僧ならば、佛敎以外に在つて之れを見てすらも、之れを寶とすべき價値があるのでありますから、殊に佛敎の門内に在つて之れを見れば、眞に無限の寶とすべき價値があるのであります。依つて佛敎に於ては、此の佛と法と僧との三を以て、佛敎に於ける三寶として尊重するのであります。

一七　成功の三寶

〔五〕成功の三寶。以上は古人の說を引き來つて、人生の寶を四方面より陳べたのでありますが、今此に私の考案を以て、更に人生の寶として成功の三寶を加へて、辯述して見たいのであります。扨て近來盛に成功なる語が流行して

參りましたが、成る程人生の要は一に成功に有りと謂ふべきであります。凡そ男子であれ女子であれ、此の成功の考なきものは、白痴も同樣であつて、殆んど文明人種の資格を有して居らぬと謂ふても宜い程で、凡そ人たる者には、此の成功の考が最も必要なのであります。

然らば其の成功とは如何なる意味を有して居るのであるかと云ふに、何事に係らず、人として爲すべき事を爲し遂ぐるのが、即ち成功であります。而して人として爲すべき事は、實に千差万別であつて、元より一概に言はれませぬ。農も人として爲すべき事柄であります、又商も人として爲すべき事柄であります、又獨立自衛も人として爲すべき事

柄であります、又忠君愛國も人として爲すべき事柄であります、又學問して宇宙の眞理を究むるのも、人として爲すべき事柄であります、又政治家として國家安寧の策を講ずるのも、人として爲すべき事柄であります、又教育家として後進を誘導するのも、人として爲すべき事柄で有ます。又宗教家として自ら道を求め、又人を引いて斯道に入らしむるのも、亦人として爲すべき事柄であります。斯くの如く數へ來れば、人として爲すべき事柄は、實に千差万別であると言はねばなりませぬ。而して又成功の度合に就いても、千段万段に分れまして、例へば千万里の長途に向ひ、一里進むも成功であれば、二里行くも成功であります。三

里四里十里の處まで到るのも成功であれば、百里千里の處まで行くのも成功であります。斯く其の成功にも千段万段の別をなして居りますから、私共は出來得る限りの成功を望み、其の天稟の性質に應じて、出來得るだけ事業の成功を期する考がなければなりませぬ。然らば私共は如何にして成功の目的を達し得べきやと云ふに、此の目的を達するために必要なる條件が三つあると考ふるのであります。即ち开は健康と時間と勤勉とでありまして、私は此れを以て成功の三寶と謂つてたのであります。

一八　健康の寶

先づ成功の目的を達するために、健康の必要なることより辯じませう。人間萬事は精神の力であるとは言ふものゝ、又一方より之れを考ふれば身體の力でありまして、身體なしに出來ることは一つもありませぬ。即ち身體は學問の本であります、身體は宗教にあつて道を求むる本であります、身體は金錢を得るの本であります、身體は名譽、地位、技術を得るの本であります、身體は實に人生百般の本をなすものであります。然しながら此の人生百般の本たる身體にして、若し健康を缺くことがあつたならば、人生の事業は何事をも爲すことが出來ぬので、斯る病弱の身體を持つて居るよりは、寧ろ死んだ方が增しであるのであります。故

に人生百般の事業の本は、身體の健康にありと謂つて宜いので、隨つて成功の本は健康體であると言はねばならぬのであります。此の健康體が事業の成功に必要であることは恰も家屋の建築に地盤の必要なるが如きものであります。依つて私は成功に就いて第一に必要である寶は健康體であると信じ、此に成功の寶として、最初に掲げたのであります。凡べて精神的事業であれ、物質的事業であれ、健康體を要せざるものは、恐らくは無いであらうと思ひますから、成功に志ある者は先づ第一に健康を保つことに注意せねばならぬのであります。

一九　時間の寶

此の健康に次いで必要なるものは時間であります。凡べて人爲的事業は言ふに及ばず、天然の現象といへども、時間を要せずして成るものは、恐らく無いでありませう。大樹喬木に就いて之れを考へてごらんなさい、一として時間の賜で無いものは有りますまい。東京の上野公園に森然として高く聳へたる杉や松の大樹は、孰れも皆江戸開府以來已に三百年の長時間を要して、漸く今日の如き大樹となつたのであります。天然物が斯くの如く時間を要するやうに人事万端時間を借らずして成るべき事は、一も無いと謂つ

て宜いのであります。依つて此の時間さへあれば、何等の事柄であつても、多かれ少かれ屹度成功するので有ます、即ち時間を要して成功せざる者は、先づ無いと謂つても宜しからうと思ふのであります。

或る人が『時間は知識なり、時間は金錢なり』と申しましたが、實に然うで有ます。學問知識も、この時間より產出します、技術藝能も此の時間より產出します、土地、家屋、金錢等の財產も、此の時間より產出するのであります。品性、地位、名望の如きも、亦此の時間より產出するのであります。又進んでは聖人君子もこの時間より生するのであります。孔子が『七十にして心の欲する所に從へども、矩を

踰えず』と申しました所より觀れば、七十年の時間が終に彼の人格を造つたのであります。釋迦如來が六年間苦行した結果として、遂に成道正覺したのでありますから、六年と云ふ時間が彼を世尊として、三千年後の今日まで多くの人に尊敬せらるべき人格を造つたのであります。依つてこの時間と云ふをも、前の健康に次いで、人生の事業成功に取つて、最も必要なる一であらうと思ふのであります。

是に於て私共の最も歡喜に堪へられぬことは、人生の事業成功に就いて、かくばかり必要である所の時間が、天より最も公平に賦與せられて居ると云ふ一事であります。人生には隨分不公平の事が多くて、身體の大小醜美の如き、

又生家の貧富貴賤等の如き、頗る不公平の事の多きにも係らず、人生の事業成功に就いて最も貴重なる此の時間だけが、最も公平に賦與せられて、何人も一日に二十四時間を得て居ります。如何なる高貴の人も、これより多數の時間を得ることは能ず、又如何なる卑賤のものも、必ず日に二十四時間を消費することを得るは、眞に喜ばしきことではありませぬか。斯くの如く誠に公平に賦與せられて有る時間でありますから、若し私共が此の時間を利用したならば如何なる事業と雖も、多少の成功を見ることを得るに相違無いのであります。依つて私は人生の事業成功に就いて、第二に必要なる寶は、此の時間であると信じて疑はぬので

あります。

二〇　勤勉の寶

然し如何に時間が成功に就いて必要のものでありましても、此の時間を下手に使へば、事業成功の本とはならずして、却つて成功破壞の本となるのであります。この時間を上手に使用する時に、初めて成功の本となるのでありますこれを言ひ換へますと、此の時間を利用すれば成功の本となりますけれども、若しこの時間を妄用したならば、却つて成功の防害となるのであります。例へば財産も財産の使ひ方に依つて、或は名譽を得ることゝなり、或は名譽を損

審することゝなるのであります。そこで成功に就いて時間の必要なることを知ると同時に、この時間の利用を考へて此れを妄用せぬやうに注意せねばならぬのであります。

然らば時間の利用妄用とは如何なる事かと云ふに、この時間の利用と妄用とによつて、勤勉と怠惰との分れ目が生じて來るのであります。即ち時間を利用するのが取りも直さず勤勉でありまして、又此の時間を妄用するのが取りも直さず怠惰であります。乃で此の時間が知識であると云ふのも、畢竟する所勤勉が知識であると云ふことに歸着するのであります。また時間が金錢であると云ふのも、結局する所勤勉が金錢であると云ふことに成つて來るのであります。即ち勤勉は學問知識を產み出します、又勤勉は技術藝能を產み出します、又此の勤勉は動不動の財產を產み出します、又其の他の品性、地位、名望等をも產み出し、進んでは聖人君子を產み出し、佛陀如來をも產み出すのでありますから、實にこの勤勉は世の中の善き凡べての物を產み出す所の、無盡藏の寶庫であります。依つて私は人生の事業成功に就いて、第三に必要なるものは此の勤勉であると信じて疑はぬのであります。

二一　成功の秘訣

如上陳べました所の健康と時間と勤勉とが、人生の事業

二、成功の秘訣

を成功する上に就いて、必須缺くべからざる寶であります から、私は此の三を以て成功の三寶であるとして居るのであります。依つて私は成功の秘訣を問ふ人に對しては、『此の健康と時間と勤勉との三寶を持して失はざるにあり』と、答へんとするものであります。尙ほ前に陳べ來つた所の古人の說は、何れも人生に就いて必要なる寶であります。殊に老子の謂ゆる道德の三寶は、私共日常之れを修養し、以て自己の三寶として持するやうに仕度いのであります。

第十　人生の三福

一　幸福とは何ぞや

凡そ人として幸福を求めざる者は一人も無く、人々必ず求めて止まぬ所のものは、實に此の幸福であります。人々求めて止まざるのみならず、若し之れを天に得ることあれば、必ず歡喜して之れを他かざる所のものは、即ち人生の幸福と言はるゝものであります。それならば如何なるものが人生の幸福でありませう、先ず最初に於て人生の幸福なるものを定めて置かねばなりませぬ。扨てこの幸福の種類に就いても隨分澤山ありまして、功名を得るのも幸福の一

一、幸福とは何ぞや

であります、富貴に處するのも幸福の一つであります、又幼にして其の親を有つて居るのも幸福の一つであります、老えて子の有るのも幸福の一つであります、生れながらにして才氣あるのも幸福の一つであります、學んで學問技藝に長ずる所あるのも幸福の一つであります、斯くの如く詳細に尋ね來れば、幸福の種類も千態万狀であると謂はねばなりませぬ。然し是れらは何れも皆幸福と云ふものには相違ありませぬけれども、其の中に於て最も人の歡ばざるを得ぬものは何でありませう。多くの人は勘もすると、資産家を以て幸福の標準として居ります、即ち財産のある人を以て、最幸福者として居ります。然らざれば地位名望のある人を以て、人生の幸運兒として居るやうに思はれます。然し私の考を以てすれば、人生の最幸福といふものは、決して金錢でもなければ、地位でもなく、又名望でもなくて、是れ等以上の所にあると思ふのであります。即ち身體の健康と、家庭の平和と宗教の信念と、此の三つのものは實に人生無上の幸福であると信ずるのであります。

二　身體の健康

〔一〕身體の健康。私は人生の幸福の第一を、身體の健康であると思ひます。前の章に於て、身體の健康は人生事業の成功に就いて、第一要件となる實であると陳べて置きま

二、身體の健康

したが、今また再び此の身體の健康を以て、人生の幸福の第一に數へねばならぬのであります。地位、名望、富貴と云ふやうなものは、元より人の欲する所であるに相違ありませぬ。即ち地位、名望、富貴と云ふものは、之れを得さる者に比較すれば、これを得て居る者は幸福と言はねばならぬけれども、若し一度び身體の健康に比較したならば、殆んど幸福と云ふべき價値なきものと、謂はねばならぬものであると思ひます。凡そ私共が地位を得て喜び、名望を得て歡び、又は家に巨萬の資産を積んで樂しみ、春は春の別莊に花を賞し、夏は夏の別莊に暑を避け、秋は秋の別莊に月を觀め、冬は冬の別莊に寒を忘れて樂しみ暮すと云ふ

も、身體の健康を得たる後のことであります。若し身體の健康を缺いて居つて、病を患つて居るやうでは、如何に花を見て酒を飲まれ得る境涯でも、決して樂しいことは無いのであります。また如何に美人を枕にしながら、秋の月を賞し得る境涯に在つても、決して樂しいことは無いのであります。又如何に其の地位高く、其の名望優ぐれて居つても、常に病弱の身體を持つて煩ひ惱まされて居るやうでは、其の地位や其の名望も持ち甲斐なく、却つて其の地位や其の名望を捨てゝも、健康なる身體を得たいと云ふ考を惹起するに至るのであります。故に身體の不健康ほど人生に取つての不幸は無く、身體の健康ほど人生に取つての幸福は

二、身體の健康

無いと、謂はねばならぬのであります。

凡そ身體の健康を失つた者は、眼があつても自由に物を觀ることが出來ず、耳があつても自由に聲を聞くことが出來ず、手があつても自由に物を取ることが出來ず、足があると雖も、心の向ふ處に到ることが出來ませぬ。隨つて此に如何なる山海の珍味があつても、如何なる音樂があつても、如何なる美麗の物があつても、之れを味ひ、之れを聞き、之れを觀ることは出來ぬのでありますから、人生百般のことは、皆身體の健康を得た後のことであります。されば身體の健康は人生快樂の本であつて、又人生幸福の基礎であります。之れに依つて若し人の病床に臥すやうになつては

平常の欲望は皆悉く消え果てゝ、唯一心に病痾の平癒せんことのみを希望して止まぬのであります。此病時に於て一切の欲望が消え果てゝ、唯一心に病痾の平癒を祈つて止まざるは、人生の不幸は病痾にあると共に、人生の幸福は身體の健康にあると云ふ、活きた證據であると信ずるのであります。依つて私共は何でも衛生に注意して、身體の健康を祈り、人生の幸福を造り、以て人生の義務を果さねばならぬと考ふるのであります。

三　人は家庭を要す

(三)家庭の平和。人生の幸福は第一に身體の健康にある

三、人は家庭を要す

ることは、誠に疑はれぬ事實であります。去れど人は獨身生活を許さぬもので、幼にしては必ず親を要し、老ては必ず子を要し、壯にしては妻を要し、又夫を要するは、人生自然の要求であります。此の四つのものを缺乏しては、殆んど人たるの資格を以て、社會に立つこと能はずと謂つて宜いのであります。依つて社會に立つて充分活動しやうと思ふには、どうしても平和の家庭を要するのであります。去れば彼の孟子は、『老て妻なきを鰥と云ひ、老て夫なきを寡と云ひ、老て子なきを獨と云ひ、幼にして父なきを孤といふ。此の四の者は天下の窮民にして、告ることなき者なり。』と言はれました。幼にして親なき者、老て子なき者、

老て妻なく又夫なき者ほど、世に不幸な者はありませぬ。實に天下の窮民でありまして、告ぐること無き者であります。告ぐることなき者とは、苦樂を共にして、語り合つて呉れる者がないと云ふ意味であります。眞に人にして親なく、子なく、夫なく、妻なく、更に兄弟姉妹なき者、即ち一人の家族をも有つて居らぬ者は、樂が有つても其の樂を共にして呉れる者なく、苦痛が生じても其の苦痛を訴へ、これを助けて呉れる者が無いのでありますから、人生に於てこれより不幸の者は無いと謂つて宜いのであります。依つて私は前に人生の三樂なる章下に於て、平和の家庭を以て人生の一樂として置きましたが、今復この家庭の平和を

以て、人生の幸福の一に數へたのであります。

四　苦樂を共にする者

人は自身と其の苦樂を共にして異れる異身同體の者が、獨りでも多いのが最も幸福なのであります。而して其の苦樂を共にして異れる異身同體の者としては、先づ家族の者の中に求むるより、外に求むる者はないのであります。稀れには朋友の間に在つて、斯の如き者が有ることもありますが、それは實に砂中の金塊で、鮮い上にも少いのであります、どうしても父子夫婦兄弟姉妹と云ふ家族の間に於て、求むべき筈のものであります。去れば幼にして親なく老て子なく、又妻なく夫なき所の、家族の無い者は、誠に不幸の者と謂はねばならぬのであります。然し親あり子あり、妻あり夫あり、更に兄弟姉妹の家族が揃うて居つても、若し其の家族の間に於て平和を缺くやうな家族であつたならば、其の不幸は推して知るべきであります。此の如き家族ならば、敢て自身と苦樂を共にして異れぬことは、言ふまでもないことであります、寧ろ此の如き家族ならば、有るよりも無きが增しであると謂つて宜からうと思ふのであります。

五　人生の不幸者

世の中には立派な家族を有しながら、家庭團欒の樂といふことを知らずに暮す人があります。即ち親があつても其の親を親とせず、甚しきに至つては其の親に對して、恰も仇敵の如き觀を爲す者が無いとも申されませぬ。又子があつても其の子を子とせず、甚しきに至つては或は後妻に惑ふがため、或は我が子の妻を嫌ふが餘り、終に我が實子をも憎み嫌ひ、血統上父子の關係あるにも係はらず、精神上相互に殺戮しつゝありと謂つて宜い、眞個怨敵の狀の斷えざる者さへあります。父子の間すら既に斯うであれば、元來

何等の關係のなかつた者が一朝相方意氣の、相投ずるものあるか、或は外人の媒酌に依つて夫婦の約を結びし夫婦の間に於ては、一層斯の如き狀態の演ぜられつゝあることを推知するに足るのであります。即ち一時は偕老同穴の契を結び、鴛鴦の交を重ぬるに至つた夫婦の間ですらも、忽にして相和し、忽にして相離ると云ふ如きことは、世上往々目擊する所でありまして、彼れ等は和し易き丈け又別れ易いのであります。然のみならず、下流社會に在つては、婦にして節操を守らざる者あると共に、又上流社會の弊風として、よし一夫多妻と言はれざるにせよ、一夫多妾の弊風は今尙ほ公然として行はれつゝありと云ふべき有樣であります

す。而して其の結果たるや夫婦間の交情は全く薄らぎ來り、隨つて其の兄弟姉妹と云ふも、皆な其の母を異にして居りますから、兄弟とは言ふものゝ、兄弟の實情無く、又姉妹とは言ふものゝ、姉妹の情誼が無いのであります。此の如き親子、此の如き夫婦此の如き兄弟姉妹が相集つて一の家庭を爲して居りましても、家庭團欒の樂などと云ふをは、夢想するとも出來ぬのであります。而して私共は此の如き家庭を、所謂地位あり、名望あり、資産ある者の中に見るのでありますが、彼等は實に世の不幸なる者であると謂はねばならぬのであります。

六　人生の樂園

讀者諸君よ、能く考へて御覽なさい。如何に其の地位が高くとも、如何に其の名望が有つても、又如何に巨萬の資財を積んで居つても、又如何に家族の者が打ち揃ふて居つても、家庭團欒の樂の缺けた家庭であつたならば、其の家庭の人々の愉快と云ふものは、決して他に向つて得らるべきものではありませぬ。實に人生に於ける樂園は家庭の外に向つて求めても、決して得られぬのであります。故に此の家庭の樂園を造り得ざる人は　人生に於ける不幸者で、この家庭の樂園を造り居る者ならば、其の地位は低くとも、

其の名望は揚がらずとも、又其の財産が乏しくとも、人生に於ける幸福者であります。即ち親は子を疑ひ、子は親を疑ひ、妻は夫を疑ひ、夫は妻を疑ひ、兄は弟を怪み、弟は兄を訝ると云ふやうでは、到底家族一同安心して生活することが出來ず、一家は互に不愉快を以て滿されつゝ、今日の日を送らねばならぬことになつて來るのであります。此く不愉快を以て滿されつゝ、今日の日を送るやうなことでは、人生の幸福とは申されぬのであります。それ故に私は、功名よりも、地位よりも、富貴よりも、人生の幸福として數ふべきものは、身體の健康と共に家庭の平和であると信ずるのであります。故に私共は身體の健康を計ると同時に、

家庭の平和を造り、幸福なる、人生の中に活動せねばならぬのであります。

七　宗教の必要

〔三〕宗教の信念。身體の健康も亦家庭の平和も、共に人生の幸福であります。然しながら私共は、是に於て人生なるものは如何なるものかを、深く考へて見ねばならぬのであります。先づ最初に私共は、私共自身に就て考へて見るに、私は獨り生れて又獨り死なねばならぬ者であります。若し之れに就いて考へたならば、身體の健康を得るも、家庭の平和を得るも、未だ眞の安心と云ふ譯には參らぬので

あります。如何に身體の健康を得、又家庭の平和を保つて居つても、或は妻を先き立て子を先き立て、或は親を失ひ夫を亡くし、或は自分自身が此の死出の旅路に就かねばならぬことがあります。前に申しました如く、幼にして親なきもの、老て夫なき者と妻なき者と又子なき者とを合せて、孟子は天下の窮民であると申しましたが、私共は如何(どう)しても、皆一度はこの天下の窮民にならざるを得ぬのであります。夫れ故に如何に圓滿なる家庭を得て、平和の夢を續けて居つても、其の平和の夢は永久に續くることが出來ませぬ、此の家庭團欒の樂は實に一時的の者であつて、無限の時間に比較して見たならば、大海の一滴と云ふも、尚ほ例

となちぬのであります。凡べて私共人たる者は、老病死の免かるべからざるものあるとは、前に『人生の三苦』に於て辨じて置きました。既に此の老病死の免るべからざるものの有る以上は、如何に身體の健康を得るも如何に家庭の平和を得るも眞個精神上に大安慰を得ると云ふことは、到底望むべからざることであります。然らば私共の精神上に大安慰を與ふるものは果して如何なるものであるかと云ふに、即ち宗教的信念であります。宗教的信念ある人は、精神上に大安慰を得るの根據を得て居りますから、宗教の信念ある人は人生の幸福者であると謂はねばならぬのであります。依つて私共は、此の人生に於て、宗教の必要を生じ來るの

であります。

八　宗教の寄生蟲

宗教と云ふても區々でありまして、一概に言ふことは出來ませぬ。世の中には病氣を拂はんがため、或は金を儲けんがため、或は火難、水難、盜難等を免れんがため、或る者に對して祈念祈禱を凝す者あるを見て、直に之れを宗教であると看做して居る人も有るやうであります。然しながら此の如きは、人生の僥倖を求むる一種の迷信であつて、其の多數は宗教に依つて起り、又宗教に依つて生活して居ります故に、之れを許して言へば宗教の寄生蟲とでも謂つ

べきものでありまして、之れを以て眞の宗教といふ譯には參りませぬ。眞の宗教と云ふものは、根本的に、死の問題を解決するものであつて、此の死の問題を解決する者でなくば、眞の宗教とは謂はれぬのであります。而して人生の不安は何れにあるかと云へば、私共を不安ならしめ煩悶せしむるものは多々ありますけれども、其の最も大なるものは身體の不健康と家庭の不平和であります。然るに既に身體の健康を得、又家庭の平和圓滿を得て居る人をして、尙ほ不安ならしむるものは、老にあらざれば死であると謂はねばなりませぬ。結局死の問題が人生不安の根底となつて居るのであります。之れに依つて若し快く死の問題を解決

するを得れば、人生に於てこれに勝ぐれたる安慰はありますまい。而して宗教の信念は死の問題を解決するにありとすれば、宗教の信念ある人は、實に人生の幸福者であります。

九　死の問題

然し私共は、死の問題に就て知るべき所のものは、唯死の必然たることを知るの一事でありまして、此れより外には何等のことをも知るべき能力をも有つて居らぬのであります。死後の生活は果して地獄の如き苦しきものか、又果して天國の如き樂しきものか、私共は得て知るべき限りのものではありませぬ。又其の地獄が果して存在して居るとした所で、私共は之れを免るゝことを得べきや否や、又其の天國は眞に樂しき處でありとするも、私共は其の處に到り得べきや否や、亦以て測り知るべき限りのものではありませぬ。斯く何事も私共の知るべき限りの者でないと同時に又私共の力の及ぶべき限りの者ではありませぬ。要するに死の問題は常識を以てするに不可知であつて、人力を以てするに不可能の業であると謂はねばならぬのであります。語を換へて之れを言はゝ、死の問題の解決は、宗教の門に入らなくては到底出來ぬのであります。而して宗教の中にあつて或は大覺と云ひ、或は大悟と云ひ、或は大信と云ひ、

一〇、如何にして死の問題を解決すべきか　三六八

或は安心と云ふものは、畢竟するに死の問題を解決し得たる精神的狀態を言ひ顯はさんとする用語であります。故に宗教の特徴は死の問題を解決する所にあつて、死の問題解決は實に人生不安の根底を癒すものでありますから、宗教に依つて死の問題解決の信念を得た人ほど、人生の幸福はないと信するのであります。

一〇　如何にして死の問題を解決すべきか

然らば如何にして此死の問題を解決し、宗教的信念を樹つるのであるかと云ふに、宗教的信念には一片の知識をも

雖へず、唯だ佛陀の偉大なる力を信するのであります。若し私共の知識を以て解決せんとすれば、孔子聖人でさへ『我れ生を知らず、奚んぞ死を知らんや』と申されまして、到底解るものではありませぬ。依つて私共は此の不可能の死を佛陀に献じ、佛陀救濟の偉大なる力を信ずるのであります。如來の大悲の呼び聲を聞くのであります。救の主を見付けるのであります。即ち私共の全身が、救の主なる佛陀如來の光明中にあることを、信じて疑はぬのであります。何人も此の肉眼を以ては見ることが出來ぬけれども、私共は一秒時間と雖も空氣を離れて生活することは出來ませぬ夜となく晝となく、私共は空氣の中に棲息して居ります如く、

私共は肉眼を以つては拜むことが出來ませぬけれども、心眼を以つて拜み奉るべき佛陀如來は、常に私共の肉の中にも、心の中にも充ち滿ちて、一念一刹那の間も離れ給はぬのであります。即ち私共は、大慈悲者なる、大全能者たる、大救世主なる佛陀如來の力の中に起臥しつゝあるのでありまして、私共の生も死も、佛陀は善き樣に計ひ給ふのであります。故に一度び私共の心眼が開けて、此の佛陀如來を見奉れば、我は我にして我にあらず全く佛陀なり如來なりと謂ふて宜い程に、佛陀と我と相離るゝことの出來ぬ、極めて親しきものであることを、深く信じて疑はぬことになつて來るのであります。隨つて私共の生も死も、全く彼の

佛陀の計に任せて、我として計ふこともなければ、又煩ふこともなき身となつて、唯佛陀の救を歡ぶのみであります。此の如き狀態に至つたのを、死の問題を解決したとも言へば、宗教的信仰を獲たとも、大安心の境涯に至つたとも言ふのであります。私は之れに就て、前の「人生の三不能」と云ふ章の、第三の生存欲の不可能と云ふ所で少しく辨じて置きましたが、此に再び之れを說いて、宗教的信念は、人生の最大幸福であると定めたのであります。

× × × × × × × ×

一一　人生と宗教

上來私は人生問題の上に就き、十章に分つて辨じて置きましたが、畢竟するに人生と云ふものは、一面より觀れば樂觀的の邊もありますけれども、其の樂觀と云ふも眞の樂觀ではなくて、遂には悲觀に歸すべき所の樂觀であります。人生は悲觀的のものであると云ふに決着するのであります。人生が斯く悲觀的のものでありますから、唯だこの人生のみを見て、人生以上の所を見ざる者は、人生の諸問題に就て煩悶懊惱し、遂に自ら其の生命を斷つか、或はまた其の反動として、人生の規律を破り、敢て法律上及び

道德上の罪人となるのであります。依つて私はこの人生に處するには、どうしても宗教の信念を以てせねばならぬと信ずるのであります。若しこの宗教的信念を以て人生に向へば、如何なる人生問題が起り來つても、容易に之れを解決し得て、而も何等の苦悶なく、人生は全く眞の樂觀に變じ、快く人としての業務を勵み、人生の義務を全うすることが出來得ると信ずるのであります。

人生の行路　終

明治四十一年七月十五日印刷
明治四十一年八月十五日發行

定價金八十錢
郵稅八錢

編輯者　岩上行波
東京巢鴨町二丁目三十五番地
發行者　原子廣宣
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷者　熊田敏
東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所　熊田活版所

版權所有

發行所
東京巢鴨町二丁目三十五番地
振替口座番號　三壹二貳
無我山房

柏原祐義 秀義 峯 共編

新刊

香樹院語錄

全一冊

布綴美本 金七十錢 小包八錢

本書は、御自筆の自撰帳や御門弟の御手控から最も私共の信念の鏡となるものを選したるもので云はゞ師の精神の全体である。信仰は得やすくして得難しときびしく誡め、又得難くして得やすしと優しく諭かれた所の壓烈と濃厚との生きた力である。編者は本書を以て自らを打つ鞭と致したいのであります。（編者識白）

多田鼎著

新刊

恩寵の宗教

全一冊

假裝美本 金二十三錢 郵税四錢

恩の思想は光の泉である想に氣のつかぬ者の世界は暗黑である聖でも丑知つてゐる者の天地には光が溢れてゐる從來の東洋の思想界の根底には此思想が行渡つて居た然るに新時代の人心には是が餘程薄らいでゐる何となく生活の上に潤たみがなく自殺者がふえ醫繪が盛なのは此ためである恩の思想を中心とせる佛教は茲に是非唱へられねばならぬ「恩寵の宗教」を世に廣くすゝむるのは此故である讀者に慰安奮勵の光のあたへらるゝことを疑ひませぬ

無我山房

眞宗大學教授 佐々木月樵選

新刊

秀存語錄

全一冊

クロース綴 金六十錢 郵税六錢

本書はどうしても安心が出來ず、信仰が頂けぬ所から、常に眼を聖教にさらし、深夜俄かに名師の門をたゝき、或は高僧に接して種々の教をうけ、身は一派の學頭にてありながら名も知れぬ愚痴無知のいふことも、こばこれ實感の餘瀝なれば、丁寧に之を記し置きて、それを自己一生の修養に供へ給ひし一蓮院秀存講師の全部錄也。

文學博士南條文雄校閲 赤沼智善阪井習學著

新刊

聖典物語

全一冊

クロース綴 金八十錢 郵税八錢

本書は浩汗なる漢譯藏經より優雅なる說話、史傳、教訓、譬喩等を集むること五十餘種、中に雄渾なる詩想あり、好個の畫題あり、哀に優しき物語あり、壯烈肺肝を斷くが如き教訓あり、腹を抱へて笑倒せしむる喜劇あり、巧妙なる譬喩あり。文體清く麗くして何人にも解し易く、一讀、著者が苦心經營を知ることが出來る。

無我山房

文學博士 村上專精 著

新刊

人生の行路

全一冊

布綴美本 金七十錢 小包八錢

人格は力である、光である。而して人格の完成は是非共修養にまたねばならぬ。修養には道徳の修養もある、信仰の修養もある。人生はこの修養によりて滋味あるものとなるのである。本書は村上先生が多年の蘊蓄を傾注して、是篇の問題を痛切に解釋し判決せられたる精神的の物であります

和田龍造 伊藤證信 等著

新刊

偉人の言行

全一冊

上製 七十錢 郵税八錢 並製五十五錢 郵税六錢

天上の月光草葉の露に宿るとき、そこに種々の光となる。絶對の靈光人格の上に際るとき、そこにさまゞ〳〵の影彩を現す。本書は古今偉人の人格を透して佛陀の慈光を味はむために、古今の偉人十數人につき孰聖なる著者各自の所感をものせられたるもの也。

無我山房

多田鼎 著

第二版

正信偈講話

全一冊

洋裝美本箱入 總ふりかな 金一圓五十錢 小包十二錢

正信偈は、親鸞聖人と共に、他力佛教の大道に歩む者の、朝夕讃誦する頌讃也。斯道の教理及び其歴史、恐く此に示さる。本書は其譯文を掲げ平易に一偈の字義大意を講じ、具に現代の思潮に映じ來る其清新の奥旨を明かにせり。苟くも假名を讀み得る程の者は。必らずや茲に斯道の要旨を領得すべし。是れ廣く世に薦むる所以也。

文學博士 南條文雄 著

第二版

歎異鈔講話

全一冊

洋裝美本箱入 總ふりかな 金八十錢 小包八錢

歎異鈔は親鸞聖人他力信仰の聖典といはんより親鸞聖人その人といふ方が適當である、所謂我聖人の心のうちに絶對他力の大精神の凝り固まつたのが本書である。本講話は博士が心血をそゝいで何人にも分るやうに其深意を發揮せられたものである。

無我山房

文學博士　南條文雄著

第二版

梵本和譯大無量壽經

全一冊　クロース綴　金一圓五十錢　小包八錢

梵本から直ちに和譯にした御經は、建國已來この書が始めてゞある。本書には丁寧に從來の五存經を對照してある。尙は卷末に阿彌陀經の梵本和譯を附錄としてある至極結構な書である。

文學博士　南條文雄著　多田鼎註

近刊

同朋心得十ケ條講話

全一冊　假裝美本　金十五錢　郵稅二錢

眞宗の御同行が日常是非共心得ねばならぬことを南條先生が丁寧に御話になつたのを多田鼎先生が懇ろに註を書き加へたる親切なる讀物であります。

無我山房

清澤滿之著

八版

精神講話

全一冊　假裝美本　金三十錢　郵稅四錢

精神修養に關する先生の經驗を述べたまへる者を集めて一冊子としたるを本書とす。故に眞摯に自己の精神の修養に心がくる者又は熱心に內心の安住を求むる者一度本書を讀まば、其所得蓋し尠からざるべし。とにかく、本書は先生が精神上に實行しつゝあることを記したるものなるが故に、本書を讀む者亦其精神を以て讀むべきなり。

清澤滿之著

第二版

懺悔錄

全一冊　クロース綴　金七十錢　郵稅八錢

本書は「眼病日乘」「隨感錄」「在床懺悔錄」「有限無限」の四編を輯めて一書を成す。煩悶する人よ、迷惑する人よ、修養に志す人よ、信念に渴く人よ、時ふ本書を手にしてそが清涼なる光風に接せよや。

無我山房

清澤滿之先生著

第二版

佛教講話

全一冊　假裝美本
金三十錢
郵稅四錢

本書は清澤先生の講話を集めたるものにして精神講話の續編也本書の內容は倫理以上の根據、人の怒を恐るゝこと、自ら侮り自ら重ずること、我以外のものを當にせぬこと、精神主義、仙力信仰の發得、佛教の現利、新禱は迷信の特徵也空想の實用、黃金世界、普通道德と宗教道德との交涉、我信念、吹血したる肺病人に與ふるの書等にして精神講話に依りて多大の指導を受けたるものは此書に依て得る處亦尠からざるべし

清澤滿之先生等著

第五版

精神主義

全一冊　假裝美本
金三十錢
郵稅四錢

『精神主義』は苦みの谷をたどれる迷者、慰めの光明を認めたる歡喜の叫びなり。『精神主義』は社會に苦み、自己に惱める人が導びきの如來を信じたる安心の聲なり。『精神主義』は宗教の祀戒なり、信仰の告白なり、救濟の發揮なり。『精神主義』は本實の祀戒なり經驗の懺悔也我等の精神狀態を有の儘に表白したる者也。

無我山房

文部次官澤柳政太郎序　安藤州一著

增補三版

清澤先生

信仰坐談

全一冊　クロース綴
金三十五錢
郵稅四錢

澤柳先生の序文に曰く「余は世の修養に志せる者にすゝめるに此の小冊子を再三熟讀せんことを以てするものなり」と。先生今や世にあらざるも世人は必ずこのうちに活躍せる先生の面影に接し長へに無上の教訓を受くべし、

理學士　稻葉昌丸譯

第四版

エピクテタスの教訓

全一冊　クロース綴
金七十錢
小包八錢

社會に活動して勝利者たらんと欲せば實力を有せざるべからず。實力とは何乎金力乎權力乎學力乎、本書は此等以上の力即ち品性の力を皷吹することに於ては天下無比の良書也。敢て勃興國民の精讀を慫慂す

無我山房

曉鳥敏著

第二版

求道錄

全一冊
假裝美本
金三十錢
郵税四錢

斷乎たれ、勇猛たれ、成功しても失敗しても男らしくあれ「求道錄」二卷は力の福音なり、望の引接なり、釋尊キリストとソクラテスと親鸞とトルストイとエピクテタスとは本書に躍如して現代の青年に大道を示導せむ

眞宗大學教授 齋藤唯信著

第二版

信仰と修養

全一冊
假裝美本
金廿五錢
郵税四錢

實業をやるにも教育界にたつにも、政治界に立つにも、信仰と修養とがなければならぬ。本書は著者多年佛教研究の間に蘊蓄したる信仰と修養との經驗を吐露したる良書である

無我山房

毎月一回 十日發行

精神界

（定價一部金拾二錢前半年分金七十五錢一年分金壹圓三拾錢）

經に曰はく、如來は我等の舍なりと。我等、如來に憑らずば何處に往きてか罪惡の風をのがれむ。我等、如來に歸せずば何の處に向ひてか、煩惱の雨を避けむ。たゞ我等に如來在ます。我等こゝに安じ、こゝに樂む。其煥爛たる慈光は、永劫、我等を護りて捨てたまはず。『精神界』は、學問の推究を勉めず、倫理の論議を企てず、たゞ斯如來の慈光をかゝげて、この中に興へらるゝ清淨高潔なる歡喜を、天下同志の兄妹と共に頒たむと欲す。故に語る所は、光明の義、言ふ所は、光明の德、きよらかなる妙樂の花は、こゝにとはに笑み、たふとき靈覺の風は、こゝに長へに歌へり。苦める者は、こゝに來れ。悲める者は、こゝに集へ『精神界』一篇の寶、廣からずと雖も、我等、諸兄姉と共に、茲に相携へて如來の慈光に醉はむ。彼の塵寰の風雨は。決してこの樂園を犯すことあらざるなり。

無我山房

エ-W-90

毎月一回
一日發行

家庭講話

定價一部六錢　半年三十六錢　一年七十錢）

家庭は信心獲得の道場である。本誌は此の考の上に立ちて發刊せられたり。（一）本傾欄には家庭の意味あひを語り、（二）講話欄には大家諸師の有難き法話講演を掲げ、（三）家庭欄には、家庭に於ける日常生活の事柄に關して、信仰的解釋を與へ、（四）思潮欄には、清新にして有益なる、佛教家庭にふさはしき小說、和歌新體詩等を載せ、（五）雜俎には聖賢の逸話、賢女、妙好人の傳記等を集め、（六）鈔錄欄には、現代諸大家の教訓名談を網羅し、（七）通信欄には、有益にして新奇なる各方面の出來事を報導す。其上信仰、處世、古事等の質疑は、求めに應じて懇切に應答する。斯くて本誌は現代に於ける唯一の佛教家庭雜誌であり升。

無我山房